I 部　隠蔽

2章　疫病（プレイグ）――環境論

1. 検 疫 隔 離

i　隔離制度

19世紀のヨーロッパ人にとって，東方は，ペストやコレラといった，疫病(プレイグ)の土地であった。とくにペストは，黒死病の流行以来，恐怖の疫病であり，疫病といえばペストのことであった。この疫病をはばむべく，ヨーロッパは検疫隔離（クオランティーン＝40日間）という制度を確立していた。

スタンダールは，その『ある旅行者の手記』の中で，マルセイユの検疫隔離所にふれ，その隔離の恐ろしさについて述べている。見えない境界線を越えてしまって，汚染されたものとして，24時間の隔離をさせられてしまった人の話や，コンスタンティノープル旅行の帰路，乗組員の間にペストが発生してしまい，それが治らぬ限り予防隔離の期間に入ることができず，数ヶ月の監禁生活を余儀なくされた人の話を書いて恐ろしがっている[1)]。この恐ろしいという気持ちをヨーロッパ人自身に感じさせる隔離制度は，どのように確立されていったのだろうか。話は，14世紀の黒死病流行時にさかのぼってみなければならない。

1345年クリミアに姿をあらわした黒死病は，47年秋にはキプロス，シシリアへと流行の歩を進め，その年の末に，ジェノヴァとピサに上陸する。同じ頃，クリミアのカッファからヴェネツィアの商船団が，その都市にペストを運んで来ていた[2)]。その翌年，ヴェネツィアの総督(ドージェ)は，ペストに対処するため，公衆衛生を保全し，環境悪化をさけるべく監視を行なう三人委員会をつくり，検疫隔離と予防組織を確立し，ペスト患者はラグーンにある島に隔離し，入港する船舶には40日の検疫隔離が課せられ，違反者は死刑が科せられた。また，同じ年，ミラノの市当局は，ペスト患者の出た家を閉鎖し，その中に病人も健康者もともどもとじこめることになった[3)]。

こうして，入港する船舶の検疫，患者の隔離，患者の家の閉鎖といった隔離制度が確立されていったと言われている。その検疫方法について，中川米造が，18世紀イギリスの公衆衛生官ジョン・ハワードのリポートによりながら紹介している。それによると，ヴェネツィアでは，流行地から来た物品や人に接触することが禁ぜられ，万一触れた場合は，短期間だが特別室に隔離された。毛織物，皮製品，亜麻は乾草の上にひろげられ，40日間空気にさらされ，蜜蠟，海綿，蠟燭は48時間塩水につけられたという[4)]。

疫病はくり返しヨーロッパをおそい，臨時の検疫制度は，常設の公衆衛生局を確立していったことが知られている。その仕事は主に人間の隔離であり，監視であり，「恐怖に基礎づけられた社会平和の実現」[5)]をめざすものであった。患者が出れば，その人と財産・物品を隔離し，移動を制限し，汚染地域を閉鎖し，公衆衛生，病院，宿屋，薬局を統制し，違反者を検束し，罰金を課

し，拷問にかけるといった権限が与えられた[6]。

ヨーロッパをあとにする旅行者は，こうした検疫制度による境界線――それは流行地・汚染地と非汚染地を分けるとともに，東と西をも分けている――を越えることになる。帰還には隔離の恐怖が待つ境界を越えて，東方への旅がはじまる。

ii　隔離体験

スタンダールが述べた，検疫隔離の恐怖は，ヨーロッパの水際における，疫病＝東方の悪の隔離・排除という場面での権力行使に対するヨーロッパ人の感情であったのだが，同じものを，東方への旅人も表出している。それを，陸路コンスタンティノープルへ向っていったキングレイクが，オーストリアとセルヴィアの国境，ドナウ川の支流サヴァ川をはさんで対峙するセムリンとベルグラードでの，西から東への移行において体験したものとして記述している[7]。

ヨーロッパ側のセムリンと，オスマン・トルコ側のベルグラードを分けるものは，検疫の黄色い旗が象徴する，疫病とその恐怖であると語られる。トルコ側に属していたすべての生きもの・物品は，14日間の隔離所（ラザレット）での拘禁を経ずには，オーストリア側に渡れない。違反者は，「あわただしい軍法的審理」を経て，「慎重に射殺され，ぞんざいに埋められる」ことになる。だから，西から東へと，この検疫線を越えるには充分な注意を払って準備が行なわれなければならない。それは，「まるで，この世との別れのごとく，厳粛に」とりおこなわれる。そして，出発。見送りのものが，旅行者から数歩はなれる。「危険にさらされ，恒常的な放逐されたもの」とみなされている検疫の役人と見送りの者の中間に，旅行者は置かれることとなる。「危険にさらされた者」が旅行者に接近し，旅行者はボートに移され，ほどなくサヴァ川南岸のベルグラードに着岸する。

こうした，儀式的な西から東への移行において，旅行者は，二つの都市，二つの世界の光景の差異を対比的に示す。セムリンは，ヨーロッパ文明の，見なれた生活の場であり，いそがしい生活のさわがしさ，その活気が感じられる世界であり，そこでは，ヴェールをまとうことのない女達の太陽の下でかがやく顔をみることができる，明かるい光と音の世界が語られる。それに対して，ベルグラードは，厳そかで，ドナウの谷に陰うつな影をおとし聳え立つ城，荘厳で荒廃した世界として語られる。「かっては世界の勝利者であった者達の，激しやすく，また，無頓着な態度」や，「陰うつな誇りの雰囲気を与える」彼らの姿が街にあふれる。街は，わびしく荒廃し，静けさが支配し，「幾世紀にもわたって，うず高くつまれた塵芥の山」の世界であると語られる。このキングレイクの描写は，活気ある，光にみち，慎重な文明の西側と，静けさの，陰うつで，無頓着な荒廃の東方を，疫病とその恐怖が峻別するという対比の構図をあらわにする。その渡河

による移行は，検疫による西側の東方隔離・峻別と理解される。そして，この移行をはたした旅行者の姿を，ベルグラード城内の人々は，「何か良いことのために送られたのであるのかもしれない，神の〈時を得た〉，不可解な，あまり愉快ではない御業として——12月に降る雪をながめるように」ながめていると語られる。暗く，目をふせたような，それでいて無頓着なベルグラードの人々の，越境者に対する姿が目にうかぶ。

いくら東方の人間が越境者に無頓着であるからと言って，検疫隔離を全く行なわなかったいうことではない。ベイルートからの帰路，コンスタンティノープルでウォーバートンは2週間の隔離を経験する[8]。その隔離所は，大きな，なにもない部屋で，壁は色あせ，床はと言えばアリとノミがむらがり，汚物と小石がいち面にひろがっている。そこで，半ば餓死したような，半ば太陽に焦がされた，陰うつな日々をすごす。壁の外からは，風にそよぐ木々の葉ずれの音が聞こえてくるが，その庭園をのぞいて見ることは許されず，海岸に遊ぶ人々の笑い声を耳にしても，その海で泳ぐことは許されず，完全な拘禁の生活を味わっていた。旅行者は，疫病をさけるように，この隔離所をさけよ，とウォーバートンは忠告する。外の自由な，安全な世界に対し，隔離空間は，陰うつな，危険な世界であると理解されているとみられよう。「この世との別れ」の如き恐怖の空間を，ここで味わうことになっている。キングレイクとウォーバートンがともにメッセージを交わしあう友であったことに注意しよう。陰うつな隔離の世界が疫病の東方を表わす言葉となっていること，旅行者の世界が自由な行為によって達成されること，そして，東方がその自由を拘束するものを表象すること，そうした言説をこの二人の旅行者の表現にみることができる。

マルセイユとともに，東方からの旅行者を検疫隔離する場所として著名なのは，マルタ島である。一つの島としてそれ自体が隔離されているせいであろうか，レイもウォーバートンも，その存在を指摘するのみで，詳しいことは何も語っていない。バイロンは，この島の検疫隔離をのろわれたものとしているが，この島それ自体は，すでに述べたように，ヨーロッパ人には気候のおだやかな転地療養の土地として知られていた。東方からのものには検疫隔離の，西からのものには療養の土地であるマルタは，東西の混交の世界として旅行者によって次のように語られている。

ヨーロッパとアジアとアフリカの服装があふれる街は，服のかがやきが七色の光でみたされる。人々は明るい服をつけ，生々として，つましく，勤勉であると描かれる。女達は，東方のかもしかの目をし，北方の編んだ髪をし，ギリシア・イタリアの彫刻のような体形をしている。街も人も女もすべてが混りあった世界として語られている[9]。疫病は排除されても，こでは東方的なるものは西側と交りあっていると表出されている。

そして，旅人達は，中東の入口，水際で，検疫隔離を味わうことになる。場所はベイルート，ギリシアを旅して来たアディソンと，アフリカを旅して来たウォーバートンが，ここで隔離される[10]。

アディソンは隔離所（ラザレット）に入れられ，ウォーバートンはそこから離れたコティジに入れられる。二人の隔離生活は，いくらか異なっている。アディソンは，その召使達によって，カーペットの床，旅行用ベッド，蚊帳が用意され，「家庭的な，安らぎの雰囲気」を味わうことでができた。それに対して，ウォーバートンが入れられたコティジは，牢獄のような空間で，寝床は石の床の上のわらの寝床で，窓にはガラスもなく，日ざしも夜の風も入るにまかせられている。桑林の中に快さそうに置かれたコティジながら，たまの散歩にも監視人がつきまとって，「退屈で品位をおとされたような，生活の喪失」を味わっていた。それでも，波にもまれ，熱射の中の単調な船の生活から解放され気持ちよく生活しており，また，ベイルートの街から友人が訪れ，新聞や雑誌，それに旅の情報などがとどけられ，心をなごませている。

この二人の旅行者の，ベイルートでの検疫隔離生活の記述の特徴は，そこからの眺望，垣間見られる土地の人々の姿の記述においてあらわれる。

隔離所からは，西にベイルートの街がひろがり，そのミナレット，塔，城，庭園，桑林が見え，北に光輝く地中海がひろがり，東に霧につつまれたレバノン山系が聳え，雲の上に山頂がのぞき壮麗な風景が目に映る。そうした風景の中，中庭のベンチに腰をおろすと，西の水平線に夕日が沈み，深紅の光に満たされ，二筋のあわい紫色の光線が天頂に向ってはなたれる。東の山からは星々が昇り，西の水平線にひろがってゆく霧の中に消えてゆく。深い静けさが，確固たる静穏さが，海と海岸を支配し，香ばしいやわらぎがあたりの空気を満たす，とアディソンは語っている。そうした世界の夜は，ときおり，月光の下の静けさを破る，魚とりの人々が網を海岸にひろげる音や，ヴェールをつけた乙女の足音，そして，その恋人との語りあいが，ウォーバートンの耳に達する。ここには期待された如き，静けさの中の美しい風景と，夕から夜へ移る刻の情景が描き出されている。隔離という空間にくるまれて，詩情豊かな情景が味わわれている。ここでは，旅行者は一歩ひいて，風景をながめる者となっている。その一歩は，検疫隔離が作り出したものとみられよう。そうした状態で，その風景の中に，土地の人々が現われることになる。

アディソンは，ラザレットの敷地内にあるギリシア教会に礼拝に来る，ギリシア人，ドルーズ派（？）の女達の姿を垣間見る[11]。彼女達は，豊かな模様のある，流れるような幅広のズボンをつけ，ゆったりとしたローブを後ろにひきづり，胸のところをひらいたヴェストに，美しく刺繍された，ゆったりとした袖をつけた服をまとい，ショールを腰にまき，長い髪をかかとまでたらしている。中に数人の美しい少女達が，つけていたヴェールを肩にかけ，顔をみせていたと描かれる。豊かなコスチュームを身につけた，東方の女の登場である。当然のことではあるが，幻影の東方のハーレムの女の如き，エロティックな姿では登場していないのが面白い。ウォーバートンの目にも，働き者の健康な美人の姿が映る。彼の隔離所の敷地内に，マロン派の一家が住んでおり，彼はその生活を垣間見る。桑の葉をつみ，蚕を育て，絹糸をつむぐ彼女達の生活と，彼女

達に特徴的な，一角獣のような錫か銀で造られた角形の髪かざりが語られる[12)]。そして，一家の一日の生活，朝のもの音と活動，昼の食事と談笑と喫煙の休息，そして午後の仕事，娯楽と食事の夕，友人達が訪問する夜が語られる。興味津々で隣家をのぞき見る旅行者の姿があらわになる。これがシリア人家族の典型であると物語ることで，ピクチュアレスクな風景の中に置かれたシリア人の風俗・習慣が隔離された者の目前にたぐりよせられたことが明らかにされる。

iii　隔離回避

検疫隔離所が，東方の風景をのんびりとのぞく，のぞき穴の如きものであるにしても，危険をともなうわずらわしいものであることに変りはない。そのわずらいを回避することが望まれる。そうした隔離回避は，東方での現地の制度に順応する形と，強行突破する形の二つの形態をとっている——この二形態は，後に述べるように，東方で旅の自由を確保するために，旅行者のとる基本的な態度の形であるが，今は，検疫に限ってみてみることにしよう。

現地の制度に順応した隔離回避は，証明書の入手によって行なわれる。1838年のペスト流行の際に，イェルサレムは，5月から7月にかけて都市閉鎖を行なっている。このときに居あわせたロビンソンとスミスは，その前日，都市を退出している。イェルサレムの周囲の町は検疫態勢を取り，自由な通行のために旅行者はイェルサレムから来た者ではない，という証明書が必要となる。そこで都市閉鎖のうわさが充分にひろがる前に，ロビンソンらはガザ（Gaza）へ向う。ガザからはヘブロン（Hebron）を経てペトラへ向うため，ヘブロン宛の証明書を用意してもらい，彼らの旅は安全につづけられた[13)]。

1851年に死海を旅したソルシィは，ヘブロンの検疫隔離所（ラザレット）の役人によって，「好運にも」助けられる。このとき，イェルサレムは，健康証明書を持たぬエジプトからの訪問者に対し，都市門外に5日間の検疫隔離を行なっていた。これをのがれるためには，エジプトから来たのではないという証明書が必要であったわけだが，その証明書を，ヘブロンの役人はソルシィのために，イェルサレムの保健局に送ってくれていたのだった。「好運にも」「立派な人」に助けられた，とソルシィはしるしているだけではあるが[14)]。

こうした，現地の制度によって隔離回避が行なわれた場合，旅行者はその事実以外に特別な言明を行なうことはないのだが，強行した場合，いくらか言いわけめいた，自尊心にかためられたような表現を使っている。

バクダッドからの旅行者に対して，トルコ兵士達が，アレッポの南モアラト・エル・ノアマン（現在は Ma'arret en Nu'mān と表記される）付近で検疫線を敷き，隔離強制を行なっている所へ，ドレイクが到着する。兵士達の検疫隔離の指示に対し強く拒否，兵士達はその勢いに屈し，とど

めたことに弁明するが，アレッポの知事にドレイクは訴え，その後この兵士達は投獄される。ドレイクの訴えは，隔離をまぬがれるために何がしかの金を払うのを期待しての兵士達の強制と考えての訴えであった。こうした強制行為に対し，ドレイクのとった行動によって，「今後，彼らは，イギリス人旅行者を，礼儀正しく，敬意を払って処遇することになろう」と語っている[15)]。

1837年にバアルベクで，コレラのためにイブラヒム・パシャの軍隊によって検疫隔離線が設定され，その兵士に停止を命ぜられた上，「イギリス人は犬」と侮辱されたリンゼイ卿は，もう少し調子をあげて言明している。リンゼイは，ここでは，エジプト政府高官の名の入ったパスポートを見せることで，彼らの態度を変えさせているが[16)]，それについて，次のように述べている。

> 彼らの，習慣になっている，ヨーロッパ人に対する横柄な態度に対しては，どうあっても反抗すべきである。……
> トルコ人は，イギリス人と他のヨーロッパ人を，我々に好意をもって，区別しはじめている。……
> 彼らは，今では，イギリス人に敬意を払い，恐れ，彼らより賢いものとして仰ぎ見，好きにはならないにせよ，尊重することを学ぶようになって来た。……
> 啓示された神の意志を信ずる我々プロテスタントが，主の義において，活発で熱烈であるべきである，偉大なる道徳の変革に，途がつけられつつあるのだ……。……
> …この地に最初に現われた福音の復活のための途を用意し，その手段を与えつつ，我々は，神のはかり知るべからざる知恵をあがめるべく，その義を知るのを，私は疑わない[17)]。

キリストの神を信じ神の義を捧ずる，イギリス人が，それ故に，ここでは，尊敬され，恐れられるべきだと考えられ，イギリス人が福音の復活を求めていると言明されているのは興味深い。検疫隔離回避に，それだけの意味がこめられている，と単純に受けとることはできないが，回避行為がそうした意味のひろがりを持つコンテクストに置かれ得ることは理解しておくべきであろう。検疫隔離という行為に関して言明されたことは，イギリス人の自由を妨害するものは，福音の復活をはばむものだということなのだから。

2. 中東で出会う病気

i　中東の人々の病気

それぞれの風土は，それぞれの病気を生む。その土地に慣れぬ者は，そうした病気に冒され易

い。それ故に，旅行者は，種々の病気に神経を使い，対策を講ずる。病気との長い格闘の歴史を有する文明は，それ以外の世界に対して勝利者の姿をとって現われる。しかし，この約束されたかに見られる勝利者＝旅行者は，常に勝利するとは限らない。その土地の病いに負けるとは，旅の失敗を意味する。従って，土地の病いは，充分に慎重な眼差しのもとに，調べられ，手当され，回避されなければならない。旅の記述は，そうした病気の詳細とそれへの対処を明らかにする。

中東という土地で，多くの旅行者は，日につく病気として，眼炎（オプサルミア）を指摘する。この病気は主に子供の頃に罹る病気で，片目がつぶれるか，全盲になっている子供達は，エジプトでもアラビアでも多くみうけられる[18]。ネジド地方の定着地の住人の３人に１人は目が悪いと言われ[19]，上エジプトのミニエ（Miniet, Minieh, Minia, Minyeh などと表記，現在は El Minya）では，１万から１万２千人の住人の内，20人に１人は，よちよち歩きの３,４才の子供に至るまで，盲目となっていると言及されている[20]。こうして，中東の人々は，炎症で痛み，はれあがり，つぶれてしまった目で旅行者を出迎える[21]。

> この欠陥が，すでに無愛想で，無知で，敵意のこもった顔つきに，嫌悪の情を起こさせる最後の仕上げの筆を加える[22]。

福音の土地をおおう敵対の眼差しを，さらに，醜悪にする，旅行者の目をおおわせる姿が，この土地の眼炎という病によって形成されていることが強調されている。

この眼病の原因について，旅行者は，この土地の風土，人々の習慣などから想定し，表記している。

エジプトに吹く熱風・カムシーンが，その原因としてあげられる。この風が運ぶ砂と塵埃，それが太陽の光を反射して生むすべてを焼き焦すような熱が，眼炎を生じさせると述べられる[23]。しかし，アラビアの紅海側，ヒジャーズ地方（Hijaz）の人々は，この病いをほとんど経験していない[24]。太陽の光と砂の風土，乾燥の砂漠という土地では，この病気は流行せず，眼炎はオアシスの病いとされる[25]。そこで，ぎらぎらした太陽の光と，カムシーンによってまきあげられた細かな埃によって弱められた目に対して，硝石を含む刺激性のある土と，極度の乾燥から過度の湿気への突然の変化が，目の縁の目に見えぬ発汗を阻止し，目を冒すと考えられることになる[26]。アラブ人は，外で，あるいは，何も体にかけずに寝るので，朝方熱ではれた目ぶたに露がかかり，それが眼炎の原因になるとも解釈される[27]。風土と習慣が中東に眼炎を流行らせる，と述べられていると整理されよう。そして，さらに，中東の人々の無知が指摘される。エジプトで，幾度となく旅行者が目にするのは，子供達がその目にハエをたからせたままにしていることである。それは，ハエを追い払うことは不信心な行為であると考えられているためだと，旅行者は理解し，

また，親達は子供を洗浄することは健康に有害だと考えていて，そうした無知や迷信が病気を生んでいると述べている[28)]。子供達が多く罹っていることが指摘されているのだから，風土に加えて不衛生さが，眼炎の主原因であると把握されていると理解できよう。

眼炎の流行の状況と原因が明らかにされると，次にその症状が記述される。

最初は単純な結膜炎にはじまる。10日ほどで進行し，煙にまかれたときのような，刺すような痛みがはしり，目の縁がはれあがり，目がひらかなくなる。そして化膿し，眼炎へと変化する。角膜が不透明になり，瘢痕＝潰瘍を生じ，手のほどこしようがなくなる，と旅行者は記述している[29)]。こうした症状に対し，中東の人々は，まず，三日三晩目を光と風が入らぬよう覆い，その後冷水で洗浄する[30)]。アラブ人は，「この病いでは，目を水で洗わない」とされ，水洗いは一時的に気分を良くはするが，後にいっそうひどい痛みを与える，とダウティは述べている[31)]。エジプトの医者は，眼炎の患者を暗い部屋におしこめるが，これではかえって健康をそこね，病気を慢性化させてしまうのであって，彼らは，視神経を冒さぬ限り，光の刺激は目のために良いということを知らないのだ，とバートンは批難している。そこでバートンは，散歩のあとは特にだが，一日に一度は冷たい水で目を洗い，ハエが目にたかるようなことをさせず，さらに慎重にするならば，環境が変るたびに水浴を行ない，目とひたいをぬぐうようにする，とヨーロッパ人の対応を明らかにしている[32)]。より積極的な治療としては，ギリシア人医師が勧める，特別に精製された粉砂糖を毎晩目ぶたに入れる方法が紹介されている。レイの召使いはこれで治ったと言う[33)]。また，医者としての関心から中東を旅していた，リチャード・マッドン（1798－1886）――アイルランド人でバイロンの友人，この旅でカイロの総領事ヘンリー・ソールトの死をみとっている――は，炎症がおさまるまで腕からの放血を行ない，ウスベニタチアオイ（marsh-mallow）の煎じ汁に鉛糖（酢酸鉛）数粒を入れたぬるま湯で洗浄するという治療法と，慢性になった場合，明礬と石灰の硫酸塩の刺激性のある洗浄液を注意して使用するという治療法を紹介している[34)]。不衛生な環境での洗浄から，より積極的な洗浄法が，ヨーロッパ人の手でとられていることが明らかにされている。

ハエという目に見える不潔さに関わる眼炎が指摘される一方，線虫という目に見える病気の原因も旅行者によって注目されている[35)]。それは，メディナ虫（Guinea-worm, Filaria Medinensis）による病気で，この虫は足，腕，胸，ひざから出て来て，とくにふくらはぎを好み，ひどい痛みを起こさせるが，死の直前まで患者を歩けなくするということはないと指摘される。この虫が皮膚から出ない場合や，取り出すときにちぎれたりすると，患者は死に至る。この虫は，雨季に入って最初の雨水の中に居ると言われている。

細菌学が未だ発達せず，多くの寄生生物の存在が明らかにされていない，19世紀の旅行者にとって，目に見えるもの以外は，原因の不確かな病気で，その方が多かったことは言うまでもない。

そうしたものに，種々の熱病がある。

今日どのような病名が与えられているか分らないが，旅行者によって炎症熱（inflammatory fever）と呼ばれた熱病が記述されている[36]。ヌビアやヒジャーズ，それにスエズ付近やエジプトで，この病気が流行っていると述べられている。これは砂漠での熱病で，旅をしていて太陽にさらされることが，最も一般的な原因であるとされ，日射病のひどく悪化した形をとる熱病と言われている。罹患から30時間で進行し，症状は，突然の後頭部の頭痛ではじまり，高熱を出す。嘔吐，背中の痛み，目の炎症，頬の紅潮，不安感，そして，譫妄状態が患者を襲う。手当てしなければ，こうした症状が出た後，５日から７日ほどで死に至る。治療は放血，コロシントウリの丸薬（下剤）かヤッパの服用，それに甘汞（塩化第一水銀）を５粒とジェイムズの粉，タマリンドの振り出し液による。そして，熱で皮膚がかさかさになるときは，酢と水で体を洗い，発汗するまで行なうと良いと言われている。

もう一つの熱病は，旅行者にむけて病気の情報を書いているマッドンのみが指摘している。それは胆汁症の弛張熱で，間歇熱と間違い易いので特に注意して識別すべきものだと言う。植物や動物が腐敗し，ナツメヤシが繁り，塩の外被で土がおおわれ，悪臭のある植物が繁った所，そうした所はミアズマ（瘴気）が発生し易く，それでこの熱病が生まれるとされる。顕著な症状は，胃の炎症と圧迫感，初期譫妄状態，黄色の目，そして進行すると，黒い粘性のある胆汁の嘔吐，左脇腹のふくれ，激しい頭痛，短く早い脈博，下痢となると言う。治療には，放血と甘汞と阿片，ジェイムズの粉と下剤（ヒマシ油，コロシントウリ）が使われ，体に酢がぬられる。間歇熱と間違えキナ皮を治療に使うと，肝臓が悪化，死に至ることが多いとされている[37]。

この二つの熱病は，中東を旅する者には特に危険であるが，その治療法が定かであり治るものとして，旅行記には示されている。もし重大なことになるとすれば，それは旅行者の不注意ということになろう。

もう少し明らかな熱病は，赤痢とチフスであろう。この二つの病気は，指摘はされているものの，詳しくは述べられていない[38]。19世紀の旅人達には，ナポレオン戦争は身近かなものであったと思われるが，この戦争には赤痢と発疹チフス（牢獄病）が常につきまとっていた[39]。どちらも不潔さに関わり，18世紀には赤痢が飲料水に関わっていることが知られていたが[40]，旅行者は，果実の季節における流行と，充分な量の甘汞による治療について述べているにとどまる。チフスに関しては，牢獄熱＝チフスと，チフォイド（腸チフス），あるいは，腐敗熱とが言葉の上で区別されているだけである。

ヨーロッパで，中世に流行し，それ故に隔離所（ラザレット）まで作られるに至った癩病（レプラ）は，15世紀の半ばより減少化し，17世紀にはほぼ消滅していたし[41]，15世紀末に突然ヨーロッパにあらわれ，ナポリ病（フランス側からみて）とかフランス病（イタリア側からみて）と呼ばれてきた梅毒は，その

初期の激しい症状が変化し，16世紀末には衰退していたと言われているが[42]，この二つの病気は，よく知られた病気であるためもあって，旅行者の目にはきわだったものとしては映らなかったようだ。ヒジャーズ地方の貧民階層の人々の肌に白い斑点をみつけることはあっても，一般の人々は癩病にはほとんど罹ることはないと指摘されているし，エジプトでは梅毒はとくに軽いようだとまで言われている[43]。癩病への傾向がアラブ人の血にはある[44]，とのダウティの言及があるが，それは，彼の，眼炎はアラブ人の血につきまとう病気である[45]，との言説とともに，病気が人自身に結びつけられて理解されるというパラダイム――ジャック・アタリが「体のシーニュ」と名づけた，中世以降のヨーロッパの認識体系に関わる言説と考えられよう[46]。時代は除々にではあるが，病気を「病原体」として理解し，それを患者の体から分離して排除する，という治療のパラダイムへと変換しつつあったが[47]，それをこうした旅行者の言説に認めることはむつかしい。

しかし，病気を人体から，完全には取り出して識別することができず，それ故に，そうしたものとしての病気それ自体に言及する言葉を的確な形では持っていなかったとしても，病気そのものが想定され，それをねらいうちするという言説と対応を，旅行者が全く持っていなかったとすることはできない。そのことは，間歇熱（マラリア）と天然痘への対応にみることができる。

古代ギリシアで，沼沢池のミアズマ（瘴気）による，四日熱，三日熱，一日半熱と記述され，大きく硬直した脾臓を特徴とする病気と認められていた間歇熱は[48]，アレクサンドロス大王の死因とも言われ[49]，17世紀にはヨーロッパ各地で流行し，クロムウェルを苦しめていた病気であった[50]。その17世紀に，ペルーに居たイエズス会士によって，キナの木（バーク）の皮がこの病気に利くことが注目され，17世紀半ばには，「イエズス会士の粉薬」の名でヨーロッパに知られるようになっていた。19世紀のヨーロッパ人にとって，ナポレオンやバイロンが罹病した病気として，腐敗と醗酵によるミアズマ，暑さや毒気，催熱性の霧などによっておこる病気として知られた間歇熱に対し，1820年にはフランス人によって，キナ皮からキニーネが抽出され，予防と治療に充分な効果あることが確認されていった。このキニーネのヨーロッパへの供給地は，第二次世界大戦まで，オランダ人によるジャワのキナ農園であったと言われている。予防法も分かり，治療も可能となっていた間歇熱も，1890年代まで，そのマラリア原虫は認められていなかった[51]。

伝統的な考えに従って，19世紀の旅行者は，間歇熱の原因をミアズマとしている。東方の最も不健康な場所の一つに数えあげられたヒジャーズでは極度に一般的な病気とされ，スエズでは，北からの強風で湾の水が引き，沼沢が生まれて太陽光線にさらされる春に流行る病いとされ，ダマスカスでは，都市を流れるバラダ川が，東へ出て沼沢地を作っており，そこから生ずる有害な蒸気が夏と秋に生み出す病い――ダマスカス熱と，ここでは，名づけられている――とされている[52]。マッドンによれば，東方では，湿地，湖，森林，平らで未耕作の土地，稲田，ジャングル，よどんだ池などがミアズマを生む場所として恐れられ，日出前と日没後が間歇熱に最も罹りやす

い時で，日中や夜，地上12フィートの高所，霧から保護された状態ならば，比較的安全だとし，エジプトでは，日出前に説明できない臭いをともなう霧が地表をおおっているのが見え，この霧が湿っぽい冷気を，とくに間接部に伝え，胃に入りこむと語っている[53]。

旅行者によって指摘された症状は，日発熱や三日熱で，慢性化すると脾臓が肥大し，腹や足がふくれるというものである[54]。バートンによれば，酢蜜やシロップといった冷たい飲み物で治療されるという[55]。キナ皮やキニーネの用い方は，マッドンが詳しく述べており，最初の処置として，吐剤を，次に下剤を与え，二日ほどは甘汞とジェイムズの粉を与え，発熱が少しおさえられた所で，熱発のとぎれ毎にキナ皮，または，キニーネの硫酸塩を与えるとしている[56]。ほとんど失敗のないキニーネは，東方では極めて貴重で手に入りにくく，ダマスカスでは，イギリス総領事ファレンの夫人の努力で，ヨーロッパ医師が確保され，都市住民にこの薬がもたらされ，さらに供給をつづけるべく薬局が作られた，と言われている[57]。

目に見える霧，蒸気＝ミアズマの中に何か病気をひきおこすものがあり，それに対して攻撃を加えることのできるキニーネがヨーロッパ人の手ににぎられているという構図が，これら旅行者の記述のうちにみてとれる。その薬＝ヨーロッパ人の発見物によって益を得ているのは，ヨーロッパ人旅行者のみではなく，土地の人々もであることを，旅行者は確認している。人体に，患者の体に特定化されてきた——もちろん風土も含め——病気は，この間歇熱では，別なあるもの・存在として把握され，病気そのものが攻撃の対象となっている，という言説をみてとることができよう。こうしたパラダイムの変換は，アタリによって，天然痘の予防としての種痘の確立において指摘されている。

天然痘は，ジンサーが，ツキュディデスの記述するペロポネソス戦争のときに流行したアテネの疫病を天然痘と同定しているほど[58]，昔から流行し知られている病気であるが，その予防として，人痘接種という方法のあることは，古くより，アラビア，北アフリカ，ペルシア，インドなどでは知られており，11世紀にはインドから中国に伝えられてもいたとされている[59]。この予防法をヨーロッパにもたらしたのは，1717年から18年にコンスタンティノープルに駐在したイギリス大使夫人，メアリ・ワートリィ・モンタギューで，彼女自身1715年に天然痘に罹患しており，夫の在任中に息子に種痘を受けさせ，さらに帰国後，1721年のイギリスでの天然痘流行時に娘に種痘を受けさせた，と言われている。翌年には皇太子妃がその子供達に種痘を受けさせていた[60]。40年代にはイギリス全土に普及するようになり，とくに軍隊で行なわれるようになっていった。牛痘による感染が，人痘のものより軽く，危険の少いものであることに注目し，牛痘による種痘が考えられたのはそれよりおそく，1796年にジェンナーが試みて世界に紹介し，1800年にヨーク公が種痘協会を設立し，また，1805年にはナポレオンが全軍に受けさせヨーロッパに浸透していった[61]。

こうして19世紀の旅行者は，種痘というワクチン療法を知っていて中東を旅し，天然痘の流行を目の前にしている。

1813年の，ヌビアのベルベル（Berber）での天然痘の流行は，紅海岸の港町，スアキン（Souakin，今は Suakin）の商人によって伝えられ，ナイル流域全土にばらまかれたもので，大人も子供も罹り，3分の1は回復し腕と顔に斑点を残していた。ここでは，8年から10年に一度は流行し，疫病より恐れられ，感染を恐れる多くの住人は山地へ移住すると言われている。種痘は知られているものの，あまり益のないものと考えられ，行なわれていないと言う[62]。天然痘はアラビアの聖地メディナでは死を与える病と考えられ，多くの子供達に種痘が行なわれている。ヒジャーズの天然痘は，土着の病気とみられている，と記述されている[63]。1878年のアラビア中央部アネイザ（Aneyza，今は'Unayzah と表記）での流行は，ダウティによって目撃されている。それは，メッカ帰りの，アネイザのキャラヴァンが買って連れてきた奴隷の子供によってもたらされたものであったが，付近の村々には伝染しなかったと言われ，このとき，すべての子供に種痘が行なわれたが，これを行なった医者は，人痘接種故に多くの子の命が失なわれたことをダウティに明らかにしている。この医者は，キリスト教徒の行なう牛痘接種ならば種痘による死者が出ぬことを本で知り，乳に痘痕のある牛を見つけようとしている。ダウティは，町の主だった者を集め，この医者をアラビアの北へ送り，牛痘接種の技術を修めさせるよう提案するがうまくゆかず，「将来の共通の利益に対する欲求や希望が，アラビアの人々を動かすことも，協同させることもできないし，また，彼らは，天からの恩寵に対し不信心を意味するということで，人が安全のためにあらかじめ考慮する，ということを全く好まない」，と絶望的な言葉を使っている。1日に数人の子が死ぬようになるが，彼らはすべての薬を拒否し，500人の死を数えて終息に至っている。ダウティは，知人の子供の死を見つめ，自分の力の及ばなかったことに心の痛みを感じていると書いている[64]。ここでは，旅行者は，無知で，頑迷な土着の人々に対し，救済者たり得る者の姿をとって現われている。明らかに存在する病気自体に対して，安全さを確かなものにする手段を有する者こそ，この土地を安らかな，豊かなものにすることができる，という思考をみてとれよう。少くとも天然痘に関しては，アラブ人もこの思考を受け入れていたように思われる。アラブ人自身，種痘は北の方からもたらされたと考えており，南からもって来られた痘苗は重んじられないとし，北にはイスラーム教徒の種痘師は居ず，キリスト教徒の種痘師のみであり，その種痘師にしてもらうため，ベドウィン達はダマスカスに行っている，とダウティは述べている。また，ときには，こうした種痘師が北部の村々の巡回の途中，ベドウィンの所まで足をはこぶことがあり，砂漠の町にも，キリスト教徒である種痘師が，これまでに何人か来たことがあるという[65]。後にこうした医療行為者としての旅行者の姿をみることになろう。そのとき旅行者＝救済者の置かれるべきコンテクストをみることになろう。

新しい種痘がもたらされ得る状況であることを明らかにしつつ，旅行者は，住人達の天然痘への対応の仕方を明らかにする。

一つには，恐しい病気として，その患者を見棄てる，という対応の仕方が指摘される。ダウティは，一人のベドウィンの偉大な族長が，同族の者達にも，親族の者達にも，家族にも見棄てられた悲劇を紹介する[66]。もう一つの対処の仕方では，患者は，暗い部屋に閉じ込められる。ダウティは，習慣上こうして閉じ込められた患者には，視力を失なわせないため何の薬も与えられぬと述べているが，バートンは，ヒジャーズ地方の例として，日中だけ患者の部屋が密閉され，夜は常にそのベットの脇に，キャンドルやランプが火をともされて置かれ，悪霊やお化けを近よらせないようにしているとし，水にとかしたアンチモンの粉末を飲ませ，また，盲目にならぬようその溶液を目ぶたにぬるとしている[67]。どちらにもせよ，アラブ人の天然痘患者への対処の仕方は，この病気を患者の体それ自体に結びつけ，放棄，あるいは，隔離という手段を講じているのが言及されているとみてとれる。不健康な土地，不衛生な習慣，頑迷な信仰，無知な対処，そうしたもののすべてが，中東の風土に病を生み，救済者たるべき旅行者と対面する，というのが旅行者の言説の構図であると理解できるであろう。

ii　旅行者を襲う病気

不健康な環境，不衛生な習慣，それに，頑迷な信仰のせいにされた眼炎は，この土地を訪れる旅行者をも襲う。まずは罹患の理由が求められる。

カイロからスエズへと，砂漠を進むスティーヴンズが眼炎に罹る。古くて使いならされたものではない，全く新しい皮袋に水を入れて来たために，水は二日目に早くも損われ，三日目には全く飲めなくなってしまい，オレンジで喉の渇きをいやしていたところ，目に炎症を感じてしまう。持っていた粉の目薬も，それをといた水が悪化していたわけだから，かえって炎症を悪化させてしまったと語られている[68]。しかし，スティーヴンズの眼炎罹患の言及は，その結果を明らかにせず，どうやら，砂漠の旅の教訓の提示といったところか，と思わざるを得ない。砂漠では，水に気をつけよ，とくに，それを入れる容器に気をつけよと。

エジプトでマッドンが眼炎にかかる。最初は，目がはれぼったくなって視力が低下，そして，目に石が入った様な痛みがして，眼球の炎症を感じ，まぶたが閉じられなくなる。そこで，自分自身で放血をし，炎症をおさえるために，ウスベニタチアオイと鉛糖の生まぬるいローションを試み，痛みはいくらかやわらぐが，目のはれはひかなかった。放血をくり返して痛みがなくなり，炎症はおさまったが，光に耐える力と視力は低下したままであったと述べている[69]。眼炎に罹った旅行者にとって，この視力低下は，つきまとって離れぬ厄介であるようだ。アラビアは，ネフ

ド砂漠西方の村，タイマ（Teyma，今は Taymā' と表記）でダウティは目に炎症を覚える。明け方の冷気の中で口にした水のせいかと考える。10日ほど不自由な日々をすごし，目を洗浄したがうまくゆかず，洗浄をやめて２週間ほどで回復する。しかし，このアラビアの旅の期間，視力は充分に回復することなく，夜に水を飲んだりすると，調子が悪くなることがあった，と述べている[70]。上エジプトで二度も罹患した――この事情は明らかにされていない――ブルクハルトは，目で遠くにあるもの，廃墟などを，確認できなくなっている[71]。詳細に，風景を，廃墟を記述することが，眼炎によってはばまれている。わずらわしい目の不調は，ここで，知的な眼差しに対し一種の覆いとなっている。そして，そうした目の不調を起こすものが，東方の風土であり，気象であり，風俗習慣である，と言明されていたのだから，こうした東方的なるものが，眼炎という形を通じて，旅行者の目に覆いをかける，という言説の構図をみてとることができよう。もっとも，あからさまにそれが言及されているというわけではないが。

中東における熱病で，チフスと赤痢については詳しく旅行者が述べる，ということはなかったわけだが，逆に，旅行者を襲った病気としては詳しく述べられている。

マッドンはアレクサンドリアで赤痢にかかっている。６月24日の聖ヨハネの祭日の頃の――後で述べるように，この時期は，季節の変化を示す時期とされている――，しっとりおりた露のせいで罹患するが，甘汞を飲んで助かった，と述べている[72]。このマッドンの言及では，生命の危険とは全く何の関わりもないかのように，熱病がとりあつかわれている。しかし，赤痢やチフスは，ときに，旅行者から旅を，さらには，生命をもうばいかねない状態をつくり出す。

アラビアの旅で，マスカット（Mascat，今は Muscat, Musqāt と表記）に居て，パルグレイヴは腸チフス（typhoid illness）に罹る。船でアラビア湾を進むうちに悪化し，動けなくなり，譫妄状態がつづく。バスラ（Baṣrah，今は Basra, Al Baṣrah と表記）へ，そして，バクダッドへはこばれ，ヨーロッパ人にむかえられ，治療を受ける。「さもなければ，他の多くの放浪の旅行者のように，私の旅は，この世から全くおさらばする，という形で終りをむかえたであろう」[73]。ヨーロッパの医の知識に与かることで，九死に一生を得たというわけだ。

イスラームの聖地，不健康なヒジャーズ地方で，ブルクハルトは，一連の熱病――赤痢とマラリア，と解釈されよう――に苦しめられ，旅の無効の危険を味わうことになる。

眼炎と疲労の苛酷なヌビア旅行の後，紅海を渡ってジッダ（Djidda あるいは Jeddah, Jidda と表記，今は Jiddah）に到着――1814年７月19日のこと――，その４日目にブルクハルトは高熱にみまわれる。これまでの旅が水を欠いた，ひどい食事の旅の連続だったので，市場に豊富に並べられた果実をむさぼるように口にはこんだのだが，熱発は多分このせいであろうと述べている。数日間譫妄状態がつづき，スアキンからの船でいっしょだったギリシア人が看病してくれた。「（彼の）助けがなかったら，多分（自分の）体力は尽きてしまっていたであろう」と述べている。一

時小康を得て，ギリシア人が手配してくれた，ジッダの町医者（床屋）が，生姜，ナツメグ，シナモンで作った薬しか利かないとしながらも，ブルクハルトの求めに不承不承応じてくれて，放血をしてくれる。こうして，２週間ほどで歩けるまでに回復する。とは言え，この熱病による衰弱と疲労とで，ジッダの湿気に富んだ暑さはたえられず，山の方のタイフ（Tayf と表記，現在は Aṭ Ṭā'if）にのがれ，そこのおだやかな気候で完全に回復したと語っている[74]。

ブルクハルトは，その後４ヶ月メッカに滞在する。この間，二度にわたる熱病罹患とはげしい下痢にみまわれる。体調は良くなく，倦怠感と気力喪失，食欲不振の日々をメッカで過ごす。病気は主に，ここの悪い水のせいだと述べている。炎天下を粗末な食事で旅してきた者にとって，ここの水は，一時的には軽い緩下剤となって有益であるものの，定着している者には下剤をおこさせるものとなるのだとしている。回復期にある者にとって，水はあたり易くなっている，ということか。あるいは，赤痢が流行している，ということを示しているのか，ブルクハルトの言葉から判断することはできない。ともあれ，数ヶ月の失調の日々を過ごすことは，旅そのものに影響する。不十分な体力では，ヒジャーズ各地を訪れることがかなわず，「旅行者が健康をそこねた場合，最も悪いことには，健康におくびょうにならざるを得なくなり，注意するに値いしないように思われる疲労や危険が心を占めてしまう」といった状態に至っている[75]。体力と気力が失なわれ，旅への不安が旅行者を拘束する。そう自覚する旅行者の姿は，中東をおおっている病気の影——後に述べるように，疫病の影なのだが——に圧迫され，進行を阻害された旅行者を明示する。こうした中で，ブルクハルトは，さらに，マラリアに冒される。場所はメッカよりメディナに移される。

1815年１月の末にメディナに移ったブルクハルトは，４月の初めまで，マラリアに苦しめられる。熱発の２日前，メディナに駐留していたトゥースン・パシャ——ムハンマド・アリーの息子——に，その医師ヤフヤーを通じて，持っていたキナ皮を渡してしまっていたブルクハルトは，治療の手立のないまま，最初の１ヶ月の日発熱にみまわれる。高熱，嘔吐，そして，はげしい発汗の日々がつづく。その後，１週間ほどの小康を得るが，再び発熱する。今度は三日熱で，嘔吐はつづき，しばしば卒倒し，ついには，全く力が失なわれ，床についたままになってしまう。「この頃までに，私はエジプトに戻るすべての希望を失ない，ここで死ぬ覚悟をした」と述べ，アフリカ協会の承認を受けぬまま，ヒジャーズまで来てしまい，そこで死亡するというニュースが，自分の旅を，無分別な，過度に熱狂的な任務遂行とする批難をまきおこすであろうことを思って意気消沈する。気をまぎらわせるような人とのつきあいもなく，なぐさめは人から借りたミルトンの１冊であった。このようにブルクハルトを苦しめたマラリアも，４月に入り，春の暖かさが戻るとともにおさまる。しかし，熱発がおさまっても２週間は歩く気にならず，春の風を体に感ずる度に，再発の恐れを味わっていた。熱病で体力を使いきったブルクハルトは，この不健康で

不衛生な都市をできる限り早く退散しようとする。回復期の体では，陸路をアカバへ向い，さらにカイロへ，という計画は実行できるとは考えられず，イェンボ（Yembo と記述，現在は Yanbu'）から海路をとることにする[76]。

4月21日メディナを発ったブルクハルトは，イェンボへのキャラヴァンの途中はげしい降雨にみまわれて，再び発熱し，4日間の高熱と夜分の発汗と日出頃の悪寒のくり返しの中を進み，イェンボに入る前日には，はげしい嘔吐と発汗の「旅での最悪の夜」を過し，ようやくにしてイェンボに到着する。その町は，疫病の流行する，危険な町となっていた。乗った船には疫病患者も居て，3週間ほどの，マラリアに苦しめられた，死の危険と背中あわせの船旅を経験した。カイロに着いたのは6月24日。その後2ヶ月して，アレクサンドリアで手当を受け，ようやくにして回復し健康に戻った，と述べている[77]。

ブルクハルトのイスラームの聖地への旅は，赤痢とマラリアによって，死の瀬戸際にまで追いつめられた旅であり，無謀と批難され，無意味なものに終る危険に直面させられた旅であり，進行が妨げられ疫病と接近させられた旅であり，すべてが闇に葬りさられようとした瞬間を味わわせた旅であった。パルグレイヴを苦しめたチフスとともに，中東は，旅行者の企てを意味ないものにする病気を用意して，旅行者を出迎えている。それは，旅行者が述べていた，中東の人々の敵対の眼差しに重なる。それに対抗する力＝医の力を持つのはヨーロッパ世界である，という言説が明らかとなる。しかし，旅で罹病した者が，この世からおさらばしてしまったのでは，この構図は生きてこない。旅行記は，すべて，治癒した病気として，自ら罹った病気を表記するのは当然であろう。しかし，それでも，病気に罹った他の旅行者の死をよけて通り，目にふれぬものとしつづけることはできない。

そこで，4人の旅行者の死について，それがいかに表現されたかをみてみることにしよう。病いに倒れた旅行者の死は，他の旅行者によって言及され，また，死の自覚として語られ，あるいは，旅行記編集者の手によって再現されている。そうしたものから，旅行者の死への言及を明らかにしてゆくことにしよう。

アイルランド生れの死海探険家，コスティガンの死は，同行したマルタ人を通じて伝えられている。1835年，ガリラヤ湖に船を浮べ，ヨルダン川を下り，死海を巡航する。死海巡航の6日目で水をすべて失ない，後2，3日を全く水なしでおくり，北岸に戻った時には全く動けぬ状態で，イェルサレムに運ばれる。2日ほどして，ラテン修道院で死去したとされている。死亡の原因は，脳炎（brain-fever），あるいは，間歇熱とされている。彼は，この探険の記録を何も残さず，日記の類も残していないと言われている[78]。水を失ない，陽に焼かれ，衰弱し，熱に苦しめられた旅行者は，探険を完了しながらも，その記録を残すことに失敗している。病気は探険の意義をうばい去る。書かれてこそ旅は成立するということを，コスティガンの死は明らかにする。旅がその

姿を全きものにするのは，書かれたものにおいてであるということを，ここで再確認できるであろう。

病気が，死という形で，探険家に旅の不成立を，未達成を与えるのに対し，東方での定住者に，あるいは，東方への亡命者に，崩壊の姿，衰頽の相を与える。東方の地に，その栄光と没落の姿をもって，ロマンティックな表象であった人物は，レディ・ヘスター・スタナップ（1776－1839）である。

チャタム卿の孫，ピットの姪であるヘスターは，ピット首相のサロンの女主人（ホステス）として華やかな場面に身を置く人物であったが[79]，欧州同盟の挫折で，致命的な悲しみに苦しめ悩まされてピットは死去する。このときヘスターは，

> この〈天よりつかわされた〉しもべを生かすに足る神の恩寵を受けられなかった，貧しい島国を，嘲弄したように思える。何故とは言えないが，悲しみにさいなまれた誇り高き人々が一般に感ずる，東方の希求というものがあるのだ。レディ・ヘスター・スタナップは，この衝動に従った……[80]。

こうして，1810年，ヘスターは東方へ向うことになる。バイロンの友人で銀行家の息子であるマイケル・ブルースを愛人としてエスコート役にたて，医者のメリヨンをつれて，コンスタンティノープル，アテネ——ここでバイロンと会う——と旅し，1811年にカイロに，ヘスターは足をはこぶ[81]。自由な，独立独行の彼女の姿は，多くのヨーロッパ人の目をひきつける。バイロンしかり[82]。それに，1812年，ナザレの修道院でヘスターに会ったブルクハルトも，「この女史の，男のような精神力と，啓発された好奇心は，怠惰な無関心さで外国を急いで旅する多くの旅行者を恥入らせるのは当然である」と述べている[83]。母親が，その父がレディ・チャタムの侍医であった関係で，ヘスターの友人であったキングレイクは，出会ったヘスターの姿は上院に置かれた死したチャタム卿の絵を想い起こさせると述べており[84]，ウォーバートンは，負けじ魂と誇り高い独立心を小ピットから受けつぐとしている[85]。

こうした性格でもって，シリアを旅したヘスターは，数年を凱旋の巡幸に費す。12年には，トルコの貴人の服装で，壮麗な騎馬行列の先頭に立ってダマスカスに入城し，さらに，翌年，巨額の金を族長に贈り，ベドウィンをボディ・ガードに，ベドウィンの男の服装をして，かってのゼノビア女王の都パルミラへ向った。パルミラでは，美少女達の列の中を進み，歌とダンスの中で花冠を受ける[86]。そして，自らイギリスに向けて，「冗談ではなく，私は，パルミラの凱旋門の下で，砂漠の女王として王冠を戴いた。……私には恐れるものは何もない。……私は太陽であり，星であり，真珠であり，ライオンであり，天からの光である」と発信していた[87]。後に，ここを旅

したアービイとマングルスは，パルミラ付近のベドウィンが彼女を女王（El Malaka）あるいは，王女（Bint - el Sultan）と呼んでいる，と述べている[88)]。

かくして，ヨーロッパへ，シリアの地に栄光の絶頂にあるヘスターの姿が伝えられた。レバノン山系の中の旧修道院に住み，近隣にその権力をふるい，アラブ人に君臨すると伝えられる彼女は，子供の頃のキングレイクには，ロビンソン・クルーソーと同じ冒険の精神につらなり，おとぎ話の主人公のようであったと言う[89)]。ロマンティックな昔話の主人公のきらびやかな姿がここにある。しかし，この冒険物語の勝利の栄光もながくはつづかない。パトロンであり，愛人であったブルースは，親に呼びもどされ[90)]，ヘスターは世を捨てた貴婦人という姿で旧修道院に閉じこもる[91)]。1835年，ここを訪れたキングレイクは，彼女の「地上の王国の消滅」をみとめることとなる。

キングレイクの訪れたヘスターの住居は，アルバニア兵に護られた，誰にも顧みられなくなった城砦の如きもので，贅沢品のない部屋に彼は通される。病気で重体になり，皆が逃げ出し，一人で臥していると盗賊が来て，持っていたすべての財産を掠奪していってしまったからだ，と説明される[92)]。真実は不明だが，彼女の死の床で，同じようなことがくり返されたと報告されている。

1839年の6月，ベイルートへ，ヘスター重体のしらせが入り，アメリカ伝道会のウィリアム・トムソンとイギリス領事ムアの二人が，山を登り彼女の住居を訪れたが，彼女はすでに死んでいた。彼女をみとっていたはずの召使達は，彼女が身につけていた装身具以外のすべてのものを掠奪し，逃亡してしまっていた。

> 彼らが到着したのは夕方であった。深い沈黙が，この宮殿のすべてをおおっていた。誰にも出会わなかった。……一つの死体のみが，この宮殿の住人であった。彼女が長いこと求めてきた，人間からの隔絶は，全く完全であった[93)]。

その深夜，二人は，彼女が生前好んでいた庭の一隅に，ヘスターを埋葬した。庭を堀ると，かって，ここで死んだヨーロッパ人の骨が出て来て，彼女の墓穴の脇に置かれ，恐しい光景を呈していたと言われている[94)]。「死を想え（メメント・モリ）」の世界が，それにふさわしい小道具をともなって，この衰頽の女王の死の場を作りあげるように言表されている。この荒涼たる様は，さらに，4年後に訪れたウォーバートンによって強調されている。

ウォーバートンの訪れた，ヘスターの旧居は，一面雑草がうめつくし，大理石の水盤のある泉と選りぬきの花の咲いていた庭園は，くずれた壁，暗くゆれる木々，それをうつし出すかがり火の作る，「メランコリーな荒廃」の光景をなしていた。朝見る世界は，破壊された四阿や格子作

りの亭が，繁ったジャスミンやスイカズラの下にたおれ，荒涼としてはいるが美しい隠者の庵といった趣きあるものであった。「その沈黙と美，その豊かさと荒廃」は，神秘性をたたえ，聖地の中にあってさえ，この地へ巡礼をひきつける，奇異な世捨て人を想い起こさせるにふさわしいものとなっている，とウォーバートンは語っている[95]。輝しい栄光は崩壊し，その廃墟美はメランコリーな趣きを示し，ロマンティックな風景を成り立たせるものと指摘されている。すべては，イギリス政界の華やぎの中から，東方へと移り住み，栄光と衰頽を現出させて，西洋にその存在を明らかにした，一女性の生き死にが作りあげたものであった。その病気による死こそ，ロマンティックな荒廃の美を完成させる要素であったことがわかる。ウォーバートンが使う，ロマンティック，メランコリー，破壊（ルイン），奇異なる絵といった言葉の束が，死の風景の美学を明らかにしてくれる。

ロマンティシズムの時代の病気として知られている結核は，患者を転地療養のために，東方へ送り出していたわけであるが，転地した場所で病人は死をむかえることがある。そうした人物の一人，ルーシー・ダフ＝ゴードンは，死期の近づきつつあることを家族のもとに伝えている。

上エジプトのルクソール（Luxor）に居を置いていたルーシーは，シリア旅行の後，家族にあてた手紙で，この旅行が病いを重くし，医者から数日の命であると告げられたことを伝える。娘には，体調は悪く，もうそうながくないと，これは夫には知らせないようにと，もう一度会いたいがヨーロッパにはたどりつけそうもないと，呼吸は苦しく，助けなしにはもう何もできなくなっていると語る。数ヶ月して夫に，あとの別れがつらいから，エジプトには来ないよう求め，死のリハーサルをしてしまって，一晩意識を失っていたこと，睡眠がとれなくなり，しょっちゅう息がつまるようになっていると伝えている。夫への，家族への愛を伝え，周囲の現地の人々の彼女の回復をおもっての神への祈り，供犠を報告し，住人のあたたかさを伝えている[96]。こうした手紙の言葉には，ヨーロッパの文明と家族の安ぎを放棄せざるを得なかった女性をとりまく，悲愴なまでの状況と，彼女のストイックな対応が浮き彫りにされている。旅にある病人によって，死は，予感され，整えられ，受けとめられて言表されている。人々や家族への終りの祝福もなされ，人々による愛ある祈りの儀式もなされ，死は充分に関わられ，歴史学者のフィリップ・アリエスが昔の，伝統的態度としているような死が表出されているように思われる[97]。しかし，その一方で，その病いによる死を伝える言葉を受けとる人々，イギリスに居る家族にとっては，彼女の死は，立ちあうことのできぬ，遠ざけられ，断絶されたものとなっている[98]。旅行者によって旅された土地，そこで出会った人々，そうしたすべてのものは旅行者によって書きとめられ，その手紙を受けとる人々に伝えられていたのだが，その世界のすべては，それを伝える者の死によって，伝えられた世界から遠のき，あらためて，大きな距離の所にあることが明らかにされる。その距離の向うに，「心から，レディ・ダフの想い出を語り，祝福をもって彼女について語る」ルクソー

ルのすべてのアラブ人が居ると語られる[99]。遠い世界に，愛をよせられた女性が，その地の人々の記憶の中に生きつづけるという，ロマンティックな場面を，ロマンティックな結核による死が生み出した，という言説が理解されよう。

こうして，ロマンティックな風景の中の死と，ロマンティックな感動の中の死が表出されたことを，二人の女性の死の表現からみることができたわけだが，もう一人の旅行者の，旅の中断としての死，早すぎた死についてみてみることにしよう。場面はやはりエジプト，そして，主人公はヨーハン・ブルクハルトである。

1817年10月，カイロにあって，西アフリカ行の準備をしていたブルクハルトは赤痢にかかる。折よく，ベルモア卿について旅をしていたイギリス人医師の診察を受けることができたが，病状は進行し，難治となる。そして，その15日，総領事ヘンリー・ソールトは，現地の人々の居住区に臥すブルクハルトに呼ばれ，その遺言を書きしるすこととなる。死の床のブルクハルトは，死人のように青ざめ，言葉もはっきりしせず，死の近いことを示していたが，意識はしっかりしており，力はあって落着いていた，と語られている。ブルクハルトはソールトに，所持金のふりわけ——チューリッヒの貧民に至るまで——を指示し，所持していた本等の行先を明らかにした後，自分の死体を，「トルコ人」にひきとらせてくれるよう依頼する。ソールトによれば，企てていたアフリカ行ができなくなったことに言いおよんだとき，その顔には，望みが失なわれ落胆してはいるが，男らしいあきらめの表情があったと言う。そして，その夜，人々にみとられて死去し，イスラームの儀式にのっとって，尊敬すべき者に対する葬儀が行なわれた[100]。35年ほど後，この地を訪れたバートンは，その墓がカイロの死者の都市にあり，イスラーム教徒は彼を聖人としていると語っている[101]。

この偉大な旅行者の死については，それによるアフリカ協会の企画の挫折，中断が強調される[102]。完成を目前にした探険の破綻は，大いなる作業の未完成という表現世界に読者をさそいこむ。破壊されたもの，未完のもの，破綻したものに対する情動こそ，ロマンティシズムを特徴づけるものであり，時代はそうしたものの中に，永遠の力，神なる閃光をみとめていた。前章のはじめに示したように，印象的に登場した旅行者として語られたブルクハルトは，ここで，より広いロマンティシズムの未完のコンテクストに結ばれ，さらに，33才という年齢をもって，同時代の夭折した才能ある人々のリストに加えられる，と言えるのであろう。マクファーランドは，シューベルトを，キーツを，シェリー——かのオジマンディアスをイギリスに与えたものの一人が，すでに述べた如く，ブルクハルトであった——，バイロン，ノヴァーリス，クライストといった夭折者とともに，その破壊と破綻の情動の世界に位置づけている[103]。破綻によって，そのもくろみは偉大なものとなり，神々しい輝きに満ちることになる。もちろん，ロマンティシズムの輝きには，どこか不安定な，不確かな，そして，危険な臭いというものがつきまとっているにせよ。病気を

えて客死するとは，こうした表現世界への通行証となっているようだ。バイロンとともに，ブルクハルトも，死の荒廃の風景の主人公，レディ・ヘスターと，旅において交流したことは，決して，偶然のこととは言えないのかもしれない。旅行の精神は，ロマンティシズムのコンテクストにおいて，挫折，破綻の世界を意味づける。この世界へと，故国を飛び出した人々が，ひきつけられなかったということがあったろうか。そして，旅行者自らが，その死によって，こうしたコンテクストにおいて意味づけられることになった，と理解されよう。歴史における挫折や破綻，風景における荒廃といったものの旅行者による意味づけは，後にゆっくりみてゆくことになろう。

3. 疫病——ペスト

i　疫病恐怖

食物が変り，水が変れば，当然，人はその体調をくずし勝ちである。とりたてて問題にするほどではないような変調も，病気にかこまれた状況では，気にならぬわけはない。中東という風土は，すでに述べたように，多くの病気を生むと旅行者には理解されていた。しかし，旅行者をとりかこんだ病気が疫病＝ペストであった場合，体調変化は，単に気になるという程度を超えて，問題となる。

1815年，疫病が流行するアレクサンドリアに初めて姿をあらわしたベルツォーニは，用心してヨーロッパ人の宿舎に閉じ籠る。彼は人にふれたり，ふれられたりしないようにし，外部からもたらされるものには厳格な処置がなされ，絶え間なく香が焚かれつづける，「牢獄」に自分の意志で入ることとなる。このような，慣れぬ環境に置かれて，ベルツォーニは体調をくずしてしまう。この時期体調をくずし，嘔吐などしてそれが知られたりすると，調べられることなく疫病にかかったとされ，宿舎じゅうが恐慌に陥いることになるので，ひとに知られないようにしていた，と述べている[104]。ベルツォーニは，調子の悪さを新しい気候風土のせいとし，疫病罹患とは考えず，何も心配していないようである。多分にそれは，中東でヨーロッパ人の採った，疫病対抗手段である閉じ籠りの徹底さへの信頼と，その効果に対する確信によると言えようか。この閉じ籠りの宿舎以外に，全く何の接触もしていないと自覚する旅行者なのだから。

イェルサレム訪問の後，疫病流行のカイロに入ったキングレイクは，自分の体調変化にいささかあわてふためいている[105]。体を焦がすような熱風の吹く中，旧市やナイル河畔をロバでめぐった後，激しい頭痛がし脈搏が早くなる。疫病流行時は，それ以外の病気にはかからない，と一般に言われていることにいやな予感を覚える。多分体の不調は熱風のせいだと思われる，と自らを安心させるようにも考える。疫病に罹ったのではない，との考えは「自分の心の快活さによって，

また，この世での私の定められた人生の多くはまだもたらされず，達成されていない，という強い予感によって助長された」と語る。しかし，疫病が接触伝染するものとすれば，それがヨーロッパの一般的な考え方なのだから，自分は疫病にふれて「危険にさらされた」人々と接触してきたのだから，疫病にとりつかれたと考える以外にはなさそうだ，と結論づけざるを得なくなる。こうして，疫病に罹患したと確信し，死を覚悟したキングレイクは，親しい者への別れの言葉をしるし，来世のことを思い，死の準備をするのが当然のところ，「それと比較すればささいな意義しかないことだが」と断った上で，最後の譫妄状態に陥るまで，自分の罹患をかくすことに心を配ったとし，その理由を次にように述べている。

> 今まで種々の試練の時でも誠実に自分につくして来てくれた，（二人の召使が），私が疫病に罹ったと知って，自分を見棄てることはないと信じているが，彼らを，こうした試しにかけるなどと考えることは気の滅入ることであった。それに，疫病罹患が知られることで，確実にひきおこすであろう驚倒を私は恐れた[106)]。

疫病による死よりも，疫病によるパニックの方を恐れているのが，この旅行者の実際であるのが分かる。疫病は，仲間を，味方を一瞬にして「敵」[107)]に変える。この激変が，旅行者にとっては，堪え難いことなのであろう。何故なら，中東では，敵対の眼差しのもとに旅行者自身が置かれている，と言明されているからである。敵対するものの中に，仲間も，味方もなく放棄されることは，死よりもつらいというのが本音なのではなかろうか。しかし，キングレイクは，この恐怖から救われる。夜の一杯のお茶が，発汗をうながし，熱がひき，気力と活力がもどり，翌朝には完全によくなる[108)]。死の恐怖も，放棄の危険も，あとかたもなくなくなる。とは言え，疫病は幻想ではなく，疫病流行は19世紀前半の中東の現実であり，疫病は旅行者の恐怖の的でありつづけた[109)]。我々は，疫病流行を，旅行者がいかにみつめ，どのように解釈していたのか，また，中東の空間においていかなる意味を疫病に与えていたのかをみてゆくことにしよう。

ii　ペストの病理学

西欧語のペストという語は，ラテン語のペスティス（*pestis*）に由来するわけだが，この語は，破滅させる，という意味のペルデーレ（*perdere*）に由来するとされている[110)]。世界を破滅させる災が，ペスティスという語で表わされるということであろう。ちなみに，英語の，疫病を意味する，プレイグという語は，ラテン語の，打撃，傷を意味するプラーガ（*plaga*）に由来すると言われている[111)]。打ちかかる災厄，猛威をふるい世界を滅ぼそうとする災厄である疫病（プレイグ）＝ペストが，

現在我々が理解する伝染病として明らかにされるのは，1894年以降のことであって，19世紀の中東旅行者には，その伝染の経路も，その病源なるものも理解されてはいなかった。19世紀が理解するペストは，前に述べたパラダイム変換の恩恵には与っていなかったわけで，患者の体が表示する疾病が注目されていただけで，検疫隔離も，閉じ籠りも，病人との接触を断つという形，汚染されたものを遠ざけるという形で，疫病に対処していたにすぎない，ということを示している。そこで，20世紀のペスト理解を簡単に述べておくことで，19世紀のペスト理解を対比的に明らかにするようにしよう。すでにとられている黒死病研究の方法を，ここでもとることにしよう[112)]。

ペストは，1894年に北里とイェルサンによって発見が公表された，ペスト菌（*Yersinia pestis*, *Pasteurella pestis*）という桿菌（バチルス）によってひきおこされる伝染病である[113)]。この菌は，摂氏マイナス２度から45度の範囲で生存し，25度で最高の増殖を示すが，特別頑丈な菌というわけではない。湿った地中でも約７ヶ月感染力を持ち続け，組織内ではそれ以上に生き続けることができる。

ペスト伝染における，ノミとネズミの役割は，1894年に，ポール・ルイ・シモンによって明らかにされ，1908年，リストンのイギリス・ペスト調査委員会が確証した。つまり，ペストは，ノミによって媒介される齧歯類の病気で，そのノミが菌を人間に伝えることによって人間が発病することになる。最も有名で，力のあるペスト伝達生物・保菌昆虫（ヴェクター）は，ケオプスノミ（*Xenopsylla cheopis*）と呼ばれるネズミノミで，このノミはナイル川流域を起原とし，今日でもエジプトの最も一般的なノミである。それ以外には，ブラジルノミ（*Xenopsylla brasiliensis*）やヨーロッパネズミノミ（*Nosophyllus fasciatus*），ニワトリフトノミ（*Echidonophaga gallinacea*）といったノミがペストを伝達すると知られている。ペストは，まず，ノミにより，ハタリスやマーモット，野ネズミといった野生齧歯類の種内伝染（エンゾウオティック）をおこす。こうした野生齧歯類の巣穴は，ペスト菌を保存しやすく，土壌中や死体，冬眠中の動物の体内で生存する。こうして生存するペスト菌が，さらに充分なポピュレーションに達した野生齧歯類間で，種間伝染（エピゾウオティック）をひき起こすことになる。一度，野生齧歯類の地下都市にペスト菌が入り滞留するようになると，齧歯類のポピュレーションと季節によって，周期的にペストは流行するようになる。この野生齧歯類の伝染が，人間に伝染するようになるのは，家住性（コメンサル）のネズミへ，動物間伝染がなされることによると考えられる。こうしたネズミに，クマネズミ（*Rattus rattus*），ドブネズミ（*Rattus norvegicus*），エジプトネズミ（*Rattus alexandrinus*）がある。これらのネズミが，野生齧歯類のノミによってペストに感染し，キャラヴァン等によって人間の居住地へとはこばれ，そこで第二宿主が死滅すれば，ノミは人間へとペスト菌をはこぶことになる。人間の間での伝染がノミ，ネズミに伝達されて一定地域をこえて拡がり，広域流行（エピデミック）となってゆく。東方からのクマネズミの渡来が，ヨーロッパでの大流行（パンデミック），黒死病流行をひきおこしたことは良く知られている。

ペストには，腺ペスト，肺ペスト，敗血症ペストの三つの形がある。腺ペストは，ほとんどの

場合，ノミによって媒介されるが，肺ペストは，直接人から人へ伝えられることがある。

腺ペストの場合，潜伏期は１週間ほどで，ノミに咬まれた所に，黒い，しばしば壊疽性の小膿疱があらわれ，発熱し，はげしい頭痛，嘔吐，悪寒をともなう。熱が高くなるとともに，言葉がもつれるようになり，リンパ節のあたりに痛みが生じ，舌は白色化する。心膊は不規則になり，眼は充血し，唇や歯や舌にかっ色のかさぶたができる。意識をほとんど失なうようになり，鼠蹊部，腋の下，頸のリンパ節が肥大し，オレンジ大になり，はげしい痛みをともなう。リンパ節腫は皮下出血をおこし，紫色の瘡を作る。多くの場合，腫脹は化膿するが，ときには，つぶれることがあり，排膿口をひらくと，熱はさがり，ゆっくり治癒に至る。化膿した腫脹は壊疽をおこし，これが神経組織を麻痺させ，患者は不眠，無感覚，譫妄状態に至り，死に至る。死亡率は50－60％である。

ペスト菌が肺に到達し，その内部表面で増殖すると，肺ペストとなる。感染して，２，３日で発熱し，息苦しさがおこり，咳が出，チアノーゼがおこり，痰に血液斑点や血条がまじる。この痰に桿菌がまじる。昏睡状態となり死に至るまで，３日ほどで進行する。自然治癒はほとんどない。

ペスト菌が肝臓，脾臓で増殖すると敗血症ペストとなる。これは，ヒトノミ（*Pulex irritans*）が媒介するとされている。感染すると，はげしい頭痛がおこり，発熱し，疲労感をうったえる。日を経ずして，意識を失ない，鼻血を出し，口唇あたりからも出血，肝臓や脾臓が肥大する。血尿，皮下出血をともない，死に至る。

ケオプスノミが活動的であるのは，摂氏15－20度，湿度90－95％の環境で，春から夏に腺ペストが流行することがわかるが，肺ペストは，冬期に，咳などによる伝染が恰好となると流行する，と言われている。

iii　旅行記における疫病流行記述

19世紀の旅行者は，すでに述べたように，ペストの原因も，伝染の経路も，もちろん治療法も知ってはいない。従って，種々の伝統的疫病観や実体験を述べる他はない。

疫病の因については，ミアズマ説がとられる。これはマラリアの病因に重ねられる。つまり，疫病もマラリアも，病人の姿によってその存在が知られ，目に見えぬ蒸気を発散する腐敗を原因とするとされる。マラリアは植物性のものの腐敗により，疫病は動物性のものの腐敗によるが，こうした腐敗は，湿気と熱に依存するものとされる。もちろん腐敗するものがなければならないが，ユダヤ人街が主にそれを提供する，と述べられる。ユダヤ人街では動物の腐敗が進み，都市の最悪の，最もこみあった，最も不快な場所を形づくるし，ここが最初に疫病に襲われる，と指

摘される。ヨーロッパや中東の諸都市にユダヤ人街はみられるわけであるが，エジプトやトルコが支配する地域では，とりわけ不潔な場所とされる。この地域の都市の狭い通りは，全く清掃されず，下水溝もなく，動物の屠殺が行なわれ，汚物が推積し，それによって発生した疫病は，大気の状態によって，この地域に閉じ込められることになったと考えられた。カイロやアレクサンドリアの通りでは，犬やネコ，ネズミやラクダの死体が放置され腐敗しているのがみうけられた。そこで，マッドンは，エジプトで最初に疫病が発生したと推論する。中東の換気の悪さや不潔さが，その疫病に高い感染力を与えているのであって，清潔さが広くゆきわたり，しっかりとした警察力のある所——つまりは，ヨーロッパということ——では疫病は生じないと言明される[114)]。

エジプトでは，疫病は3月頃に始まり，夏至の頃からひいてゆき，6月24日の聖ヨハネの日の頃には終息する，と言われている。聖ヨハネの日が近づくと，ナイルは増水し，暑さはその頂点をむかえ，季節が変化すると認識されている[115)]。そこで，疫病をひきおこすミアズマは，ナイルの氾乱した場所には生じないし，土地が干あがってくると発生するのだし，地表上でナイルが変化することによって生ずる大気の状態がミアズマの発現と消散に影響を与えるのだ，と推論されることになる[116)]。

こうして，疫病がミアズマより生ずるものと理解されると，次に，このミアズマがいかに伝染するかが問われることになる。ミアズマは，数フィート離れると影響を与えない，とされている[117)]。それがどうして広い地域にひろがると考えられたのであろうか。

この時代疫病伝染は，空気伝染，あるいは，接触伝染が考えられていたわけであるが，旅行者はその双方を肯定するか，否定するかしている。例えば，マッドンは，そのどちらの例証もある，としている[118)]。したがって，疫病伝染は説明づけられぬとする旅行者も居て[119)]，混乱した状況が明らかにされている。ウィルソンは，当時の説の一つとして，「風によってはこばれた，群棲する昆虫によって」伝染する，という考えを紹介してはいるが[120)]，それを確証できずに居るし，キングレイクは，衣類，毛皮に潜む「命とりとなる，微少なもの」が接触によって人から人へ伝わり，疫病が伝染する，という説を紹介しているが，東方での体験上，接触による伝染という考えをすべて否定し，しかも，帰国して旅行記を書くに際しては，当時のヨーロッパの常識としての接触伝染説を良しとしていて，あやふやなままとなっている[121)]。

こうした，旅行者の伝染に対するあいまいな態度は，多分，疫病そのものが，検疫隔離の際にみられたように，そしてまた，疫病恐怖をみた際に明らかにしたように，旅行者の自由を拘束し，周囲から不当なあつかいを受けさせることになるから，つまりは，疫病が旅を拘束するものだからと考えられる。しかし，疫病に対して，その伝染を心の問題とする説もマッドンは紹介する。疫病は，接触伝染を気づかい，恐れる人が罹かり易いのであって，熱烈な精神の持ち主は，ミアズマを受け入れるような体の状態にならないとしている[122)]。消極的で恐怖心を持つ者のみが伝染を受け入れると言明することは，騎士道精神や冒険心といった積極的な精神を持つ旅行者が安全

であるとの言表を可能にするものと思われる。助かった者，罹からなかったものの正当化が，ここにはちらつく。何故なら，疫病は，19世紀には，すでにヨーロッパでは流行しなくなっているのに対し，東方に滞留し，そこではまだ危険であったことに，対比的な把握と精神的な意味づけが必要であったからではなかろうか。

中東での疫病流行状況は，19世紀の初めのものより記述されている。1801年から３年にかけて，エジプトは疫病の地域内流行地（エンデミック）となっていた，という意見に対して，ウィルソンは，1801年に英・仏軍の間に疫病が流行し，イギリス衛生局の力で３年に終息した，というのが真実であるとしている[123]。エジプト遠征軍と防御した側のイギリス軍を襲う疫病と，旅行者の側であるイギリスの勝利という図式は明確である。この時期のエジプトでの流行状況は明らかにされていない。

1812年以降，旅行者の旅の時点までの間，1816年と18年ということになるのだが，この間エジプトは春になると疫病が流行ると報告されている。すでに述べたように，春にはじまった流行は，聖ヨハネの日を境に下火となる。７，８月の猛暑が疫病を阻止する，と考えられている[124]。この時期の疫病流行は，まず，1813年に，レイが体験する[125]。４月初めに下エジプトでの流行の報告が入る。５月にはロゼッタ（Rosetta／Rashîd）に，10日間の検疫隔離令が出て，流行の広がりが明らかになる。ロゼッタでは日に20人の死者を数え，最盛期には日に80人もの死者が，そして，２千人以上の患者が出ていた，と述べられている。この年は聖ヨハネの日をむかえても一向に終息する気配を見せず，この日の死者は百人を数えた――但し，この数字，どの都市にあてはまるのか，レイの記述からは不確かであるが――とされている。ロゼッタとアレクサンドリアの間にある，エトコ（Etko と表記，現在は Idku）という村はほとんど全滅した，と言われている。レイは流行の終息を見ずに，アレクサンドリアを出発し，マルタ島経由で帰国しており，この後の状況は記述されていない。

1815年の流行は，アレクサンドリア，カイロに流行し，カイロでは３万から４万の人が死んだとされている。疫病はスエズに向い，さらに，綿製品を積んだ２隻の交易船によってジッダへ，そして，４月半ばにはイェンボへと伝えられることになったとされている。イェンボでの流行では，初めのうち，日に10人から15人ほどの死者であったが，半月ほどの流行で40人から50人ほどの死者を数えるようになる――人口は５千から６千ほどの町での死者の数であるとされている。ジッダでは，疫病はそれ以上の猛威をふるっており，１日の死者は250人にも及んでいた[126]。

1825年には，カイロ，アレクサンドリアに流行し，人口１万６千人のアレクサンドリアで１日の死者が18人を数えたが，この年の流行は激しいものではなかったとされている[127]。そのためか，この年の流行状況は詳しく述べられていない。

そして，最後の激しい流行の年，1835年の疫病流行が語られる。アディソンはコンスタンティノープルとスミルナで，キングレイクはコンスタンティノープルとカイロで，この流行にまき込

まれる。カイロでの死者は，キングレイクの滞在初期には，1日に4，5百人であったのが，19日ほど後には1200人にも増加したと言われ，この年，アレクサンドリアでは1万2千人——人口は，ここでは2万5千とされている——が死んだとされている[128)]。

旅行記が書きとめた疫病流行は，その流行都市，経路が明らかにされ，死者の数によってその流行の程度が明らかにされている。しかし，地域的な広がりは明らかにされず，また，死者の数値も必ずしも明確なものとは言えない。いったい誰が数を公にできるのであろうか。そして誰が，この数を旅行者に示したのであろうか。これらについて旅行記は何も明らかにしていない。たとえばベルツォーニは，疫病流行時には，すべての病死者は疫病死とされ，死者は調べられることなく埋葬されるので，殺人も横行したと述べている[129)]。ペスト・ハウスでの死者数ぐらいは，ヨーロッパ人の医者も居たこと故——マッドンもその一人である——把握されていたとは言え，疫病死の実数が把握されていたとは思えない。

旅行記の記述から，例えば，アレクサンドリアでは，1825年の人口が1万6千人で，その後10年間で9千人が増加，それが1835年1年間で1万2千人も死んで，1万3千人になったことになる。レイは，1813年の人口を1万2千人とし，疫病でその年半数に減ったとしている[130)]。従って，その後の13年間で1万人の人口増ということになる。しかし，スティーヴンズは，1835年のアレクサンドリアの人口を5万人以上とし[131)]，キングレイクの数字とはかなり異なっている。ちなみに，1843年の人口は，ウォーバートンが，6万5千人としており[132)]，疫病が流行しなくなって，1877年には，内務省資料によって，バートンが，212,034人という数字を明らかにしている[133)]。

こうした数字から，疫病流行による人口の急変動が浮き彫りになる。つまり，確かではないとしても実数を与えることで，たとえ部分的なくい違いが生ずることがあろうと，中東の実勢が把握され，疫病の力が示されることになる。それは，中東では，商人も，ベドウィンも，軍人も，町の支配者も，商品や人口の正確な実数を明らかにしないという習慣，明らかにすると天より罰が与えられるという信仰がある[134)]，という旅行者の記述に対比されるであろう。実数を明らかに

	人　　口	疫病死者数
1812年	12,000人	6,000人
1825年	16,000人	?
1835年	25,000人 50,000人以上	12,000人 ?
1843年	65,000人	
1877年	212,034人	

［表2］旅行記が示したアレクサンドリアの人口と疫病死者数

する習慣を持たない中東は，疫病に苦しめられ，その実体すらもつかめないが，西欧からの旅行者によって，その実情が把握されるようになった，という図式がここにある。しかし，その旅行者の示す実数なるものは，ほとんど根拠のないように思われる。それは，疫病死者が，ほぼ人口の半数として与えられていることからも推測される[135)]。

疫病流行の状況が，正確さの衣をまとって表出される一方で，体験的には，疫病の街は，荒涼とした風景として表出されている。旅行者の目につくことは，疫病患者が街を歩きまわっていることで，こうした「見境いのない」行為が疫病をまきちらす，と述べられている[136)]。中東の人々は用心することなく，無警戒に疫病流行の中に居る。すべては神の意志であるとし，宿命論に身をゆだねているとする[137)]。従って，彼らが接触伝染を恐れているようには思われず，罹患した者がいれば，その友人は患者を助け，病人が放棄されることはない。この点では，ヨーロッパでの流行とは異なり，疫病から回復する人の数も非常に多いと指摘される[138)]。しかし，人道的な看病，死者の記念にその衣服を身につけるという習慣，棺架にのせられた死体を洗浄する宗教的行為，これらが，中東での疫病流行をひろげるものとして指摘される[139)]。こうして，中東の街やバザールでは，患者や疫病接触者にふれずに歩くことは，ほとんど不可能なのだと述べられる[140)]。用心深く接触をさけるヨーロッパ人と，無警戒，不用心の中東の人々という対比は，検疫隔離においてみられたものであって，流行状況の表出においても当然ながらくり返し指摘されていると言える。

流行が進めば，死者の数が増加することが示されたが，当然そのことは，葬儀の増加を意味する。カイロでは，葬送は日の出から正午の間に行なわれる。木枠にのせられた木箱に死体が置かれ，ショールかスカーフがかけられ，男達の肩にかつがれる。棺架の前を歌い手が，後を泣き手がつき，友人や親族の者はその後を追う。葬列は猛スピードで街を走り，悲しみ，厳かな気分で死を悼むといった様子は，その速さがかき消している。流行は，この葬列を絶え間なく墓地へ送っていたと語られる。しかし，この東方の疫病の葬列では，ショッキングな様子を目にすることはない——ヨーロッパにおける疫病流行は，荷馬車に死体を放り込んだり，死体を放置する，といったショッキングな場面を作り出していたと表出されて来た。それは，東方の人々が平静に，静かに苦悩に耐える力を持つことにより，また，棺を使わず棺架で死体を運ぶという簡便さが，「見なれぬ，恐怖をひきおこす光景で人々にショックを与えることなく」いつも通りの仕方で葬儀を行なうことを可能にしていることによる，と説明される。埋葬も，死者の地位に従って至当に行なわれていた[141)]。しかし，それでも墓地の様子は，次のように描写されている。

> 大きな墓地では……メランコリーを心地よくやわらげるもの，死のおぞましさをやわらげるものはない。死肉あさりの動物や鳥が夜のうちは墓地を占拠し，今そこは，夜が明けて，新たな参入者——死者によって活気づけられた[142)]。

メランコリーな死者の都市（ネクロポリス）では，ときに，疫病放逐の儀礼も行なわれる。行列を作って，様々な装飾物でかざり立てられた雌ラクダを街中ひきまわし，墓地へつれて行き，そこで殺し，肉をハゲワシや犬に投げ与えていたと語られる[143]。

墓地がメランコリーな場であると指摘されているのは，甘美な感傷に豊んだ墓地を歌っていたイギリス人の詩的世界にとって，期待されていた東方の墓地であったためかと思われる。ヘスターの墓のメランコリーは，疫病の墓地のメランコリーと像を重ねる。ここでは，その荒涼さが強調されている。その一方で，疫病下の中東の人々の無関心さ，平静さが強調されていたわけだが，もう一歩踏み込んで，中東の貧しい人々にとって，疫病がまったく祭礼となっていると語られる。死者の出た家では，羊を屠り，付近の人々をまねいて供応するからである[144]。錯乱した街ではなく，疫病を静かに受けとめつつ，さらに，祭の場へと変える中東の人々が描かれている。また，疫病流行時でも，祭礼は行なわれ，その準備でテントが張られ，ブランコが作られているのを見て，キングレイクは，「ぞっとする祭日」と述べている[145]。死の中にも晴れの日が平静にむかえられているのは，ヨーロッパ人にとっては，ぞっとすることであり，またこれを機会に人が集まり疫病流行の危険性が高まるが故に，ぞっとするということなのであろう。とは言え，疫病がまれにしか襲わぬ場所では，混乱し，町を脱出する多くの人々が居たことも語られている。それはイスラームの聖なる地で，脱出によって疫病は海岸からメッカやその付近に伝染していったとされている[146]。こうした，神の定めに反した行為をとったことについて，人々は，次のような言い訳をしていた，と述べられている。

> 神は慈悲をもって，神のもとに召すために，我々にこの病いを送られたが，我々はとるに足らぬものと自覚しているので，神の恩寵を受けるに値しないと感じ，それで今は避けるのが良いと思い疫病から逃げ出した[147]。

この言葉に，ヨーロッパの読者が，あわてふためく人々の感情をみとることになるのか，災厄時でのユーモアをみとることになるのか，定かにはできないが，無知な人々の言として，医の世界からの眼差しは感じとることができよう。

こうした疫病時の人々の行為，対応の結果，中東の街は荒廃した姿を旅行者にさらすこととなる。多くの人々は死に，バザールや通りには人影は絶える[148]。人々がたてていた活動的なもの音は消え，街は静寂の中に置かれていた。生きながらえた人々も，この世の事には，全く無関心な様子で生活していたと語られる[149]。隠うつでメランコリーな姿に，旅人も意気消沈させられる[150]。そうした疫病流行時の古代都市の一つ，アレクサンドリアを，レイは次のように表出している。

古代都市の廃墟を常に特徴づけていた，メランコリーな宏壮さという様相(エアー)は，今や，近時の人口減少という著しい外観によって，非常に高められた[151)]。

廃墟の都市は疫病によって，その荒廃の姿を強められ，そのメランコリーな姿が高められて，検疫線の外にあるベルグラードで見られた姿を強調する。ヨーロッパの旅行者にとって，疫病の東方は，静寂，荒廃，死の世界という姿をとるものとして存在する。それは，他の病気ともども，旅行者をまき込み，荒廃の，メランコリーな場にひきずりこもうとしている。旅の完成のためには，この荒廃にひきづり込む疫病の力を回避し，克服しなければならない。しかし，天然痘やマラリアとは異なり，疫病の治療法は分っていない。旅行者は全くの危険の中を進まざるを得ない，ということになる。その危険は，さらに，中東の政府によって強められていた，と述べられている。

疫病が流行していた間エジプトを支配していたのは，すでに述べたように，ムハンマド・アリーであったが，このパシャは近代化を進めヨーロッパの心証を良くするため，アレクサンドリアに検疫制度を確立したが，真にその臣民を護る気はなく，２年ほどで止めてしまっていた。ブルクハルトは，トルコ人自身に意見を求めて分ったこととして，オスマン・トルコのスルタンやパシャ達は，その懐を肥やすために，疫病対策に本気には取り組まないのだとしている。中東の，とくに，エジプトの都市には，多くの外国人商人が集っており，そうした者達が相続人なしに死んだ場合，法律上その財産は国庫に入れられ，結局は支配者の私腹を肥やすことになるので，疫病による多数の金持ちの死は，政府にとっては歓迎すべきことになる。また，軍人兵士達が死んだ場合，その財産は政府に没収されることになっていた。人口の減少は歳入の減少になるなどとは中東の支配者は考えず，ただ直接的な身入りをはかり，自らが安全で，その富さえ増せば，それで良く，臣民の運命には関心を持っていなかった，と語られる。疫病は主に都市に流行り，農業地域に広がることはめったになかったこともあって，パシャにとって恐れるものは少なかった，ということなのであろう[152)]。ムハンマド・アリー自身はギゼーの宮殿に閉じ籠り，付近への接近を厳禁し，身の安全をはかっていた[153)]。中東を隠うつなものにする疫病は，このようにその支配者によってうらでは歓迎されていたのだ，と旅行者は明らかにしている。風土，環境，それに政治が，中東をメランコリーな，危険な場所とし，旅行者をとりかこんでいたことになる。

旅行者の目の前の疫病は，ほとんどが，腺ペストであることが，その症状の記述から分かる[154)]。その中でマッドンの記述が，詳しくペストの症状を伝えている。

召使いが罹患する。歩くときによろめき，酔ったような目をし，顔がむくむ。寒気を訴え，脈が早くなり，舌は中央部が白っぽい褐色になり，縁の部分が赤くなる。すぐに隔離院(ペスト・ハウス)に運ばれるが，頭痛がし，吐気が生じ，悪寒にふるえるようになる。夜に入って，前腕に青黒い斑点が生じ，

そこから紫色のすじが腋窩にむかい，腫張に終る。皮膚はひからびて熱く，目はすわり，話は支離滅裂になってくる。明け方，狂乱の態で裸のまま家に逃げ帰ろうとして，人々にとりおさえられる。顔は暗い紫色となり，腫張はオレンジ大に肥大し，腕の斑点は癰（よう）になる。首の筋肉がけいれんし，のどをごろごろさせるようになり，2，3時間して死亡する[155]。夜中の出来事以外は，マッドン自身の観察による。疫病流行時の小動物の様子については何の観察もなく，従って，病因の把握に至ることがなかったものの，病人の観察は充分であったことが分かる。治療法は分からなかったものの，腫張が破れれば自然治癒することには言及している[156]。こうした観察記録からも，旅行者は疫病に充分接近していたことが分かる。

環境においても，個人的にも疫病にとりかこまれて，旅行者は中東を旅することになるのだが，その際とるべき途は二つと考えられる。一つは疫病から避難し閉じ籠ること，もう一つは疫病を回避し，都市から逃げ出すことである。後者は自由に旅をするという行為に必然的な対応であるし，前者は中東に住むヨーロッパ人一般の対応であり，旅行者が一時的にそれに順応するという対応である。

疫病流行がはげしくなると，中東に居住するヨーロッパ人は家を鎖ざし，籠城をきめこむ。これも「隔離（クオランティーン）」と称している[157]。中東を旅する人々も，多くはここに入れてもらって，難を避けようとする。この隔離生活を営む家では，門を二重の扉にするか，枝編みの出入口を扉の外に作って二重にし，この間の空間に，二つの瓶か壺が置かれる。一つには水を入れ，食糧は一度この中に入れられる。もう一つには酢を入れ，お金がこれに入れられる。召使いといえど，家のものは外出せず，生活に必要なものは，現地人を傭って，毎日窓の所に来させ用を言いつけていた。パンは冷えるのを待って手にし，紙の類ははさみのようなものではさんで受けとり，燻蒸し，それが冷えてから手にしていた。外出する時には棒を携帯し，一切の接触を断つようにした[158]。スミルナでアディソンは，外出して墓地から町の光景を楽しんだが，その場所でその日疫病で死んだ者が埋葬されたため汚染されたとされて，家には入れてもらえなくなる。なんとか家には入ったものの，タバコとスパイスの強烈な燻蒸を受け，今後は家にとどまることを約束させられている[159]。こうして監禁生活を送る旅行者は，家の窓から流行状況をながめ，葬列をみつめ，患者の症状などを観察していた。なにやら，東方絵画の中のハーレムの女達の如く，窓辺に所在なげに寝ころぶ旅行者，といった様子が想像される。危険は身近かであるものの，検疫隔離の生活と大きな違いは感じられない。わずかながら危険をのがれた観察者の姿がここにある。

流行の拡大で隔離生活に入ったとしても，アディソンの例でみられるように外出し，見るべきものは見ていたのが旅行者であったわけだが，キングレイクのように接触伝染を信ずることがなければ，自由に出歩くことは可能であった。マッドンは自由にペスト・ハウスに出入りしていた。しかし，彼らが敢えてこうした行為をしていた，と言わざるを得ない。それは検疫隔離を回避し

ていた旅行者達の言い訳け（？）が想い起こされるからである。特権の行使というより，自信の現われをこうした行為にみることができる。すでに述べたように，ロビンソンは，イェルサレムで，都市閉鎖の直前，都市を脱出していった。旅の遂行は，こうした自由を保証する何ものか文明的なもの，宗教的なものへの信頼，自信によって行なわれたように思われる。

iv　ペスト文学における疫病

明確に，ペスト流行を記述したものとされているのは，プロコピオスの『ペルシア戦役史』（6世紀）である。「ユスティニアヌスの疫病」と言われた疫病の流行がペスト流行であるとされているのは，プロコピオスの記述に，明らかに腺ペストを示すものがあるためである。これ以降，ヨーロッパは，ボッカチオの『デカメロン』（14世紀），デフォーの『ペスト年代記』（1721年），カミュの『ペスト』（1947年）といったペスト文学を生み出していった。こうしたペスト文学が，旅行者の疫病記述のもとになっているのは，たとえば，キングレイクが，中東の流行時の状況を，フィレンツェ――ボッカチオの，黒死病流行――やロンドン――デフォーの，17世紀の流行――のものと比較していることからも明らかであろう[160]。

ペスト文学における流行記述は，旅行記の記述同様，流行の経路を指摘し，死者数の提示を行ない，病因や伝染についてふれている。もちろん，病因は不確かで，伝染についても肯定も否定もできる例が示され，医学的な混乱が示される。症状については，プロコピオス以降，正確に，腫張や譫妄状態が指摘され，喀血による死や，腫張の化膿化による自然治癒が語られている[161]。こうしたペスト文学の疫病記述が，たとえば，1日の死者数の増加，全死者数を表記することを含めて，旅行者の記述にひきつがれていったことは明らかである。

しかし，ペスト文学が，中東旅行記にとってきわ立った特徴を示すのは，流行時の人々の混乱であり，それを含む疫病流行時の都市の情景であると言って良い。ユスティニアヌスの疫病や黒死病の記述で，とくに指摘されているものは，死体や患者の放棄――親は子を，子は親を――であり，日常生活や労働の放棄である。葬儀は行なわれず，死体は種々な場所に投げ棄てられ，すべてが死におおわれ，「太古の静けさ」の中にあったとされている。ペストは，こうした混乱による荒廃の風景を，ヨーロッパに与えてきた[162]。

黒死病による混乱が，ヨーロッパに，検疫隔離という制度と，公衆衛生局による統制を生んだことは，すでに述べておいた。その一方で，ボッカチオをして，優雅な，都市脱出，閉じ籠りの生活を描かしめていた。ロンドンに疫病が流行した際も，デフォーは，上流社会の人々や宮廷も，ロンドンを脱出して行ったこと[163]，この方法が最良の疫病対策であると語っている[164]。そして閉じ籠りは，居ながらに百マイル彼方にあるに等しいものだとし[165]，窓を閉め，樹脂，硫黄などを

たいて部屋を煙だらけにし，肉は鉤からうけとり，代金は酢入りの壺を通す，という「籠城」生活について語っている[166]。旅行者がとった，脱出と閉じ籠り，という対処の仕方は，ロンドン流行の際にとられたものと同一であることがわかる。

黒死病までのペスト文学における流行記述には見られず，デフォーによって示されたものに，当局による家屋閉鎖の処置がある。患者の出た家が完全に閉鎖され，一切の出入りが禁止され，昼夜監視され，「牢獄」が出現するに至ったと語られる。患者の家の健康人は出ることができず，無情，残酷な処置であったが，公益的処置としてデフォーは認めている[167]。治安関係者の慎重な配慮によって行なわれ，緩急よろしきを得た処置であったが，脱出した病人は多く，流行防止の策としては必ずしも有効なものではなかったともされている[168]。しかし，催物，饗宴はすべて当局によって禁止され，治安は維持され，市場の自由は維持され，食糧不足という事態にはならず，街頭は常に清潔に保たれていたとされている[169]。

こうした，市民自身による対処と，当局による秩序，統制にもかかわらず，疫病が流行してゆくに従って，人々は恐慌に陥り，自暴自棄となり，都市は荒廃した姿をさらしてゆく。貧乏人は見棄てられ，脱出の混乱から，ロンドン・ブリッジの船着場は修羅場と化し，市民は絶望して拱手傍観し，街は人間が一掃され，いっさいが投げ出され荒廃し，「廃墟」の姿になる[170]。市民は，そうした廃墟の都市で，危険に対して無感覚になり，無頓着，不用心になってゆき，

> 熾烈をきわめるにいたった時には，人々は一種の東洋(トルコ)的予定説とでもいうべき考え方につかれてしまい，どうせ病気にかかるのが神の思し召しなら，外出しようと家の内にいようと同じことで，とうてい逃れることはできないのだ，などと言い出す始末だった。……その結果……これと同じことをやっているトルコやその他の国々の場合と同じ結果が生じてきた。すなわち，感染し，たおれてゆく者，じつにその数を知らず，というありさまだったのだ[171]。

こうして，絶望と恐慌の廃墟の都市が，中東の世界に結びつけられるに至る。旅行者の目にうつった中東の廃墟の都市の，疫病のもとのメランコリックな姿が，このデフォーの記述によるロンドンの姿に重なる。ここでは文明の統制の外へ飛び出し，自暴自棄となって絶望した人々の都市が，中東の姿に重ねられている。

ところでデフォーは，こうした廃墟を作った絶望の人々とは別に，信仰の人々について語っている。牧師の多くは脱出するか死亡するかして，都市には少なくなる一方，市民の方は，「今はまさしく刑罰の日であった，神の怒りの日であった」とし，教会での勤めに熱心になってゆき，死を目前にして，国教会の人々も非国教会の人々も互いに融和していったことが述べられている[172]。

そして突然，急速な疫病の衰えがはじまる。医者も，この事態を，異常なもの，超自然的なこととし，市民は神のみ手に感謝をささげる。デフォーは，これを，「ただ神の直接のみ手のみが，ただ全能のみ力のみが，このことを可能ならしめた」と語り，都市に健康とにぎわいがもどり，「人々の心は蘇生の思いでいっぱいであった」と語っている[173]。廃墟の都市の突然の再生は，神の力にのみ帰せられ，解放の喜びの中の都市が描かれる。この疫病からの解放の地，ヨーロッパこそ旅行者が旅立ってきた地と言える。絶望は解放と対置され——劇的に，と言うべきだが——，神の恩寵は東方的宿命論に対置されている。すでに示した検疫隔離を強引に回避した旅行者の，神の福音の復活への言及は，ここにその基を得ていると考えられよう。

v　中東の疫病

疫病の流行するコンスタンティノープルの街を歩きながら，キングレイクは次のように語っている。

> （疫病の存在は），私の見たもの，ふれたもののすべてに，色調と彩りを与えていた——全く陰気ではあるが真実の，そして，過去の権力や壮麗さの，荒涼とした記念物にふさわしい色調と彩りを。

ヨーロッパ人地区（ペラ）にあふれるコートと帽子は伝染に対し無罪だが，毛皮やショール，刺しゅうされたスリッパや金張りの鞍下布，そして，アロエをやく芳香とパチョリ香油の芳潤な香り，こうしたものこそ，疫病の安住の場を示す記号となっている。

> （東方君主の都で）あなたは，ただ，衰退の権力と色あせた壮麗さを目にし，笑いたくなり，嘲りたくなろう。しかし，疫病の地獄の天使を近寄せよ。されば，この天使が……ここに在ることで，あなたは，この死の帝国の影の中で様子をうかがいつつ歩み，少くとも適切な崇敬と畏怖をもってその通りを歩むようになる，そうした盛観さと荘厳さを弱体の帝国の都に復活させ得る[174]。

弱体の帝国の都市は，疫病によって過去の力をとりもどし，ヨーロッパ人はその力を畏れつつ生活をし，また旅をする。そのことが，この都市の荒廃の姿によって表象される，と言表されている。疫病がこの都市のすべてに与えている色調と彩りとは，疫病の与える恐ろしい力であり，荒涼とした姿を与える力であるとみられよう。それはアレクサンドリアの姿として指摘されていた

ことをすでに示しておいた。しかし，アレクサンドリア以上にコンスタンティノープルは，崩壊の都市の姿をヨーロッパ人に示している。この都市は，キリスト者の帝国の都として，コンスタンティヌスによって顕彰され，キリスト者に称賛されつづけた都市であった。キリストの聖遺物にあふれた都市であった。東と西の結接点は，後に分裂点となり，1453年オスマン・トルコの手に屈し，キリストの聖なる世界は破壊され，イスラームの帝都となる[175]。ここを旅するアディソンは，これ以降の歴史を「メランコリーな時代」と名づけている[176]。彼によれば，この期間のトルコの支配は，それまでの東方帝国の富を食いつぶす，圧迫と暴政であり，その無知と愚鈍とうぬぼれがトルコを停滞させ，退行させ，人口を減少させ，勤勉さを破壊していったという。「トルコ政府の悪疫の息」は，その支配の歴史を，「強奪と掠奪，没収と圧制のメランコリーなカタログ」としていた[177]。ヨーロッパの——古くはローマの——精神的な豊かさ，キリストの信仰を破壊し，自らは文明化せず退行し，衰頽と疲弊の中に在るということこそ，その帝都の今の色調であり彩りであるとされた。その「悪（イーブル）」[178]こそ，旅行者の目の前に現われた疫病に他ならぬということなのであろう。深い緑の樹陰に蔽われた家々，高くそびえるミナレット，金色に輝く三日月をつけたモスクのドーム，白い宮殿，そしてスルタンの後宮，そうした都市は，遠くから眺められると，「真に東方的（オリエンタル）な荘厳さの風景」を成しているが[179]，近寄ってみれば衰頽はかくせず，その街を疫病が闊歩していた様こそ，東方を象徴するものとして旅行者の注目の的であった[180]。

ヨーロッパにおける疫病の流行状況と，中東における流行状況の差異は，黒死病流行の際のものとして，マイケル・ドウルズが明らかにしている。

黒死病流行時，中東の人々は，ヨーロッパ人のように恐慌に陥り，混乱することなく，疫病の苦難を軽減すべく組織された祈願を行ない，葬儀，葬送，埋葬を大規模に行なっていた。窮乏者に対する助力はつづけられ，彼らのため埋葬は行なわれ，死体洗浄は勧められていた。健康者は家畜の世話をし，病人を看病していた。もっとも，都市住人の脱出や支配者の脱出はあったとされているが。宗教的な義務は基本的には果されており，ヨーロッパでのように，宗教儀礼や死者祭儀を放棄する，というようなことはなかったと言う[181]。こうした指摘は，19世紀の旅行者の指摘と変らない。こうした，ヨーロッパ人と，中東の人々の，疫病への対応の差異を，ドウルズは，前者の「恐怖のステレオタイプ」と，「神なる秩序への服従というステレオタイプ」の差異として明らかにしている。ヨーロッパのキリスト教徒は，黒死病に，深い罪の意識と恐怖で対応し，ペシミスティックになり，生を断念し，世の終末をみつめることになる。彼らは，集団としての社会の災難という形で疫病をみるより，個人的な罪や試練と受けとり，それからの個人的な救済こそ求められるべき責務であった。これに対してイスラーム教徒は，疫病を，数ある一般的な災厄の一つと考え，神によって定められたものとし，敬虔な忍従を行ない，集団として災厄に対処し，儀礼上の清浄さと組織された宗教祭式への参加という形で個人を集団的な宗教上の統一性に

ひきつけ，聖なる法に基づくコミュニティー全体の正しい行動を責務としていたと言う[182)]。個人の，恐怖の災厄という受けとめに対して，集団として対処すべき災厄という受けとめるという差異が，ドウルズによって指摘されている。社会的統制は，中東では内的にも外的にも――信仰と儀礼という形で――与えられていたが，ヨーロッパでは個人の混乱・恐慌への外的な規制として与えられることとなる。疫病から解放されたヨーロッパは，公衆衛生という文明の制度によって病気を排除しつつ，19世紀には医のパラダイムの変化を経験していった。それは，旅行者による病気記述においてみることができた。ドウルズが明らかにした中東の人々の黒死病への対処の仕方は，デフォーを通じて，旅行者の記述の中でもみることができる。疫病に関して，変らざる宿命の中東と，解放されたヨーロッパ，という図式を旅行者は持つことができていたとみられよう。

中東は，疫病の下で信仰を失うことなく，変らぬ様を見せつづけ，その力はキリスト者の聖なる都市を破壊し，キリスト者の世界を異教の世界へ変え，ヨーロッパを恐怖させてきた。中東の力と疫病の力は，キリスト者を混乱させ，キリスト者の儀礼を失なわせてきたことになる。そして旅行者が歩を進める19世紀の現在，メランコリーの世界として中東は姿を現わし，荒廃している。キリストの福音の記念の場は，その力の衰退を示している異教世界に覆われている。その覆いは，この時，疫病として，その力として中東に在るにすぎない。この時，旅行者は，デフォーの描く話し手の如く，疫病流行の世界の観察者として存在している[183)]。疫病の，死の，メランコリーの風景の観察者として，中東を覆う「悪」をみつめる者として存在している。ヨーロッパにおいて疫病から解放されてきた者が，今，他者世界においてメランコリーの覆いをはずそうとしている。覆いを観察する旅行者が，そこからヨーロッパに戻ることはなく，覆いの向うをのぞこうとしている。覆いの力は，しかし，疫病のみではない。それを形づくる自然と，そこにいる人々の力でもある。次に，そうした様々な中東の姿についての旅行者の言説をみてゆくことにしよう。

2 章（疫病 —— 環境論）　注

1）スタンダール，1983－5，（2），315－318頁。

2）Gottfried，1983，pp.36－48．流行発生時については，いくらか異なった日時を与えている者もいる。cf. Dols，1977，pp.51－54.

3）Gottfried，1983，pp.48－49．マクニールは検疫隔離の制度化の時点を，ラグーサでは1465年，ヴェネツィアでは1485年とし，アタリは，ラグーサでは1377年とし，ヴェネツィアの検疫隔離所（ラザレット）の設立を1403年としている。マクニール，1985，156頁，アタリ，1984，117頁参照。

4）中川，1983，296頁。

5）アタリ，1984，126頁。

6）Gottfried，1983，pp.124－125.

7) Kinglake, 1844, pp. 1 − 5.

8) Warburton, 1845, vol. II, pp.362−365.

9) Warburton, 1845, vol. I, pp.24−25. 女性の姿，服装などを，人々についての記述とは別に述べるのは，中東旅行者の表現に一般的である。

10) Addison, 1838, vol. II, pp.14−16. Warburton, 1945, vol. II, pp. 55−64.

11) ドルーズ派はイスラーム教シーア派から派生した宗派であって，ギリシア教会での礼拝というのはいささか疑問だが。

12) この髪かざりは，アディソンやポーターによって，ドルーズ派の女の髪かざり（タントゥラまたはタントゥール）として語られている。cf. Addison, 1838, vol. II, 36. Porter, 1855, vol. II, p.194n.

13) Robinson, 1841, vol. II, pp.320−321 & 374.

14) Saulcy, 1853, vol. II, pp. 9 −10.

15) Burton & Drake, 1872, vol. II, pp.171−172.

16) Lindsay, 1838, vol. II, pp.187−189.

17) Lindsay, 1838, vol. II, pp.189−190.

18) Burton, 1855− 6 , vol. I, p.386n. Doughty, 1888, vol. II, p.374.

19) Doughty, 1888, vol. I, p.597.

20) Edwards, 1877, p.85.

21) Wilson, 1823, p.95.

22) Edwards, 1877, p.85.

23) Wilson, 1823, p.95.

24) Burckhardt, 1829, p.241.

25) Burton, 1855− 6 , vol. I, p.386n. Doughty, 1888, vol. I, p.597.

26) Burton, 1855− 6 , vol. I, p.386n.

27) Doughty, 1888, vol. I, p.597.

28) Edwards, 1877, p.86. Burton, 1855− 6 , vol. I, p.386n.

29) Legh, 1816, p.245. Edwards, 1877, p.86. Doughty, 1888, vol. I, p.597. Burton, 1855− 6 , vol. I, p.386n.

30) Legh, 1816, p.244.

31) Doughty, 1888, vol. I, p.597.

32) Burton, 1855− 6 , vol. I, p.386−387n.

33) Legh, 1816, pp.244−245.

34) Madden, 1829, vol. I, pp.392−393.

35) Burckhardt, 1819, p.340. Burckhardt, 1829, p.242. Burton, 1855− 6 , vol. I, p.389.

36) Burckhardt, 1819, p.339. Burckhardt, 1829, p.241. Madden, 1829, vol. I, pp.397−398 ; vol. II, pp.190−191.

37) Madden, 1829, vol. I, pp.393−394.

38) Burckhardt, 1829, p.241. Madden, 1829, vol. I, pp.265 & 392. Burton, 1855－6, vol. I, p.181.

39) ジンサー，1966，172－174頁。サンドライユ他，1984，(下)，86頁。

40) サンドライユ他，1984，(下)，88頁。

41) ジンサー，1966，105－106頁。アタリ，1984，76－85頁。

42) マクニール，1985，196－198頁。ジンサー，1966，84－86頁。

43) Burton, 1855－6, vol. I, p.389. Legh, 1816, p.245.

44) Doughty, 1888, vol. I, p.437.

45) Doughty, 1888, vol. I, p. 597.

46) アタリ，1984，88－97頁。

47) アタリ，1984，207－212頁。

48) サンドライユ他，1984，(上)，101頁。マクニール，1985，99頁。

49) サンドライユ他，1984，(上)，110頁。

50) サンドライユ他，1984，(下)，89－90頁。

51) サンドライユ他，1984，(下)，91，119－120頁。マクニール，1985，249－250頁。サンドライユの本の訳語「イエズ会士の火薬」を，ピエール・ガスカールの著述にあるポルヴォ・デ・ロス・ヘスイータス（イエズス会士の粉薬）によって訂正した。ガスカール，1989，143頁。
また，この薬は，「伯爵夫人の粉薬（ポルヴォ・デラ・コンデーサ）」と呼ばれ，リンネはこの木を，薬の発見者がペルーのチンチョン伯爵夫人であるとの伝説からシンコナと名づけている。ドッジ，1988，219－220頁。

52) Burckhardt, 1829, p.399. Burton, 1855－6, vol. I, p.181. Addison, 1839, vol. II, p.73.

53) Madden, 1829, vol. I, pp. 394－395.

54) Burckhardt, 1829, p.399. Burton, 1855－6, vol. I, p. 181. Madden, 1829, vol. I, p.395.

55) Burton, 1855－6, vol. I, p.387.

56) Madden, 1829, vol. I, pp.396－397.

57) Addison, 1838, vol. II, p.214.

58) ジンサー，1966，134－137頁。

59) マクニール，1985，227－228頁。

60) Searight, 1979, p.27.

61) サンドライユ他，1984，(下)，84－85頁。マクニール，1985，227頁。

62) Burckhardt, 1819, pp.229－230.

63) Burton, 1855－6, vol. I, pp. 384－385.

64) Doughty, 1888, vol. II, pp.374－375, 403, 410 & 472.

65) Doughty, 1888, vol. I, p.295.

66) Doughty, 1888, vol. II, p.240.

67) Doughty, 1888, vol. II, p.375. Burton, 1855－6, vol. I, pp.384－385.

68) Stephens, 1837, p.157.

69) Madden, 1829, vol. II, pp.130－132.

70) Doughty, 1888, vol. I, pp.597－598.

71) Burdkhardt, 1819, p.379.

72) Madden, 1829, vol. I, pp. 219－220.

73) Palgrave, 1865, p. 420.

74) Burckhardt, 1829, p. 2.

75) Burckhardt, 1829, pp.242－243.

76) Burckhardt, 1829, pp.317－320.

77) Burckhardt, 1829, pp.403, 409 & 427.

78) Stephens, 1837, pp.386 & 396－399. Robinson, 1841, vol. I, pp.339－340. Warburton, 1845, vol. II, p. 231.

79) Gaury, 1972, pp. 2 & 30. Tidrick, 1981, pp.38－39. Kinglake, 1844, p.68.

80) Kinglake, 1844, p. 69.

81) Searight, 1979, pp. 216－217.

82) Tregaskis, 1979, pp.98－99.

83) Burckhardt, 1822, p.337.

84) Kinglake, 1844, p.68.

85) Warburton, 1845, vol. II, p.89.

86) Tidrick, 1981, pp.39－40. Kinglake, 1844, p.69. Warburton, 1845, vol. II, p.92.

87) Tidrick, 1981, p.40.

88) Irby & Mangles, 1823, pp.274－275.

89) Kinglake, 1844, p.63. オレンジの豊饒さ，平和な瞑想的な静寂さをたたえた，キプロス島の美しいベラペーの修道院の廃墟にあって，ローレンス・ダレルは「レディ・ヘスターはどうしてこの修道院を見逃したりしたのだろう？」と述べているが，アラブ人に君臨する貴婦人という姿こそが，ヘスターの隠者の如き生活に必要なものであったのではなかろうか。（ダレル，1981，91頁。）

90) Searight, 1979, p.218.

91) Warburton, 1845, vol. II, p.89.

92) Kinglake, 1844, pp.66－67, 70 & 75.

93) Warburton, 1845, vol. II, pp.94－95.

94) Finnie, 1967, p. 187.

95) Warburton, 1845, vol. II, pp.87－89.

96) Duff－Gordon, 1902, pp. 356, 358, 359, 361 & 362.

97) アリエス，1983，19－25頁。

98) 死が悲劇的で，印象的なものであるよう望まれた近代は，死を断絶とした，と言われているのだから，旅での死は二重の断絶をひきうけている，と言えようか。アリエス，1983，50－52頁参照。

99) Edwards, 1877, p. 455.

100) Burckhardt, 1819, pp. lxxxvi－lxxxix. この序文はリークが記している。

101) Burton, 1855－6, vol. I, pp.84－85 & n.

102) 例えば，ソールトの手紙にそれが強調されている。cf. Halls, 1834, vol. II, p.40.

103) McFarland, 1981, pp.13－16.

104) Belzoni, 1820, vol. I, pp. 2 － 3.

105) Kinglake, 1844, pp.173－174.

106) Kinglake, 1844, p.174.

107) Belzoni, 1820, vol. I, p. 3.

108) Kinglake, 1844, p.175.

109) マクニールは，1844年以降エジプトでは，ペストは何十年もの間姿を消したとしている。また，最後の重要なペストの発生は，キングレイクの訪問の年，1835年であるとしている。マクニール，1985，171，302頁。

110) Dols, 1977, p.315.

111) Dols, 1977, p. 315.

112) 以下，ペストについては，次の著書を参考にした。ジンサー，1984。マクニール，1985。テリアン，1977。Dols, 1977. グレッグ，1980。村上，1983。Gottfried, 1983.

113) グレッグは，1970年より，ペスト菌の公式名は *Yersinia pestis* となる，と述べている。グレッグ，1980，46頁。

114) Madden, 1829, vol. I, pp. 284－287.

115) Madden, 1829, vol. I, p.283. Legh, 1816, pp.260－261. Belzoni, vol. I, 1820, pp. 2 & 4.

116) Madden, 1829, vol. I, p.283.

117) Madden, 1829, vol. I, p.272.

118) Madden, 1829, vol. I, pp.263 & 271.

119) Wilson, 1823, p.115.

120) Wilson, 1823, p.115.

121) Kinglake, 1844, pp.24－25.

122) Madden, 1829, vol. I, pp. 262－264.

123) Wilson, 1823, pp.26－27.

124) Wilson, 1823, p. 27. Burckhardt, 1829, p.416.

125) Legh, 1816, pp.249－267.

126) Burckhardt, 1829, pp.411 & 417－418. 当時アレクサンドリアとカイロに居たベルツォーニは，具体的な流行，状況を報告していない。

127) Madden, 1829, vol. I, pp.252 & 281.

128) Kinglake, 1844, pp.157－158 & 170. Addison, 1838, vol. I, pp.154 & 183.

129) Belzoni, 1820, vol. I, p. 4.

130) Legh, 1816, p.45.

131) Stephens, 1837, p. 8.

132) Warburton, 1845, vol. II, pp.17－18.

133) Burton, 1878, p.15.

134) Burckhardt, 1829, p.39.

135) Kinglake, 1844, p.158.

136) Legh, 1816, p.259. Belzoni, 1820, vol. I, p. 4 .

137) Legh, 1816, p.255. Wilson, 1823, p.116.

138) Legh, 1816, p.259.

139) Legh, 1816, p.260. Burckhardt, 1829, pp.412－413.

140) Burckhardt, 1829, p.413.

141) Kinglake, 1844, pp.158－159 & 170.

142) Kinglake, 1844, p.159.

143) Burckhardt, 1829, p.419.

144) Burckhardt, 1829, p.414.

145) Kinglake, 1844, p.159.

146) Burckhardt, 1829, pp.412 & 418.

147) Burckhardt, 1829, p.412.

148) Burckhardt, 1829, p.418.

149) Kinglake, 1844, p.170. Addison, 1838, vol. I, p.183.

150) Addison, 1838, vol. I, p.183.

151) Legh, 1816, p.267.

152) Burckhardt, 1829, p.416－417.

153) Legh, 1816, pp.249－250. Burckhardt, 1829, p.416.

154) Kinglake, 1844, pp.162－163. Wilson, 1823, pp.115－116.

155) Madden, 1829, vol. I, pp.254－256.

156) Legh, 1816, p.260. Addison, 1838, vol. I, p.190.

157) Kinglake, 1844, p.161.

158) Legh, 1816, p.256－257. Addison, 1838, vol. I, p.183. Kinglake, 1844, p.161. Belzoni, 1820, vol. I, p. 3 . Madden, 1829, vol. I, p.252.

159) Addison, 1838, vol. I, pp.184－185.

160) Kinglake, 1844, p.170.

161) たとえば，死者数は，村上，1983，26頁——プロコピオス——，ボッカチオ，1963，13頁，デフォー，1973，97－100，280，288頁参照。症状は，村上，1983，23－26頁。ボッカチオ，1963，6－7頁。デフォー，1973，123，125，322－323頁参照。

162) 村上，1983，27－29，36－37，83頁。ボッカチオ，1963，9－12頁。Gottfried, 1983, pp.45 & 56.

163) デフォー，1973，15，28頁。

164) デフォー，1973，318頁。

165) デフォー，1973，92頁。

166) デフォー，1973，127－131頁。

167) デフォー，1973，68，79－80，87－88頁。

168) デフォー，1973，253－256，269－274頁。

169) デフォー，1973，76，253，297－299頁。

170) デフォー，1973，140，189，277頁。

171) デフォー，1973，310－311頁。

172) デフォー，1973，112－114，284頁。

173) デフォー，1973，363，388－391頁。

174) Kinglake，1844，p.24.

175) 和田，1981。橋口，1982。ランシマン，1983。Çelik，1986参照。

176) Addison，1838，vol. I，p.160.

177) Addison，1838，vol. I，pp.158－162.

178) Addison，1838，vol. I，p.163.

179) Addison，1838，vol. I，pp.110－111. Warburton，1845，vol. II，p.374.

180) Searight，1979，p.107.

181) Dols，1977，pp.172－173，238－239 & 253.

182) Dols，1977，pp.289－300.

183) Carnochan，1977，pp.75－78.